

東北学院大学教職員修養会 キリスト者教員研修会 報告書

第 16 号



私はまことのぶどうの木、
私の父は農夫である。
(ヨハネ15:1)

巻頭言

2014 年度 第 59 回教職員修養会	1
2014 年度 第 19 回キリスト者教員研修会報告	55
2014 年度 第 40 回サマー・カレッジ報告	63
2014 年度 宗教活動報告	69

東北学院大学

「愛は造り上げる」(1コリント8:1)

聖書の語る「愛」は、英語の love や、日本語の愛という言葉では表現しきれない豊かな、しかも深い意味があります。そのことは聖書の執筆者たち自身が体験したことであり、彼らは、「アガペー」という当時あまり聞きなれないギリシャ語を用いて、この愛を表現しました。ざっと300回ほどアガペー(愛)、あるいはアガパオー(愛する)という語を用いて、神の愛を聖書に書き留めました。人間の愛は、自己中心的で、気まぐれで、逆にひどく傷つきやすく、嫉妬すら生じさせがちです。しかし、私たちの知らない、しかも一見私たちと何かかわりもない神は、神の側から一方的に、私たちを顧み、私たちに拘り、手を差し伸べ、抱き留めてくださるお方です。それは、何よりも私たちは私たちのものではなく、神のものだからです。神は人間に自由意思を与え、一個の人格をもった人間を造り上げるという大冒険をなされました。それはむしろ危険なことでありました。しかし、神は、あえて人間に神のようにすらなれると思いつく自由を与えることで、むしろ主体的、積極的に神に立ち返る人間を期待されたのです。ためらいなく、喜んで神に近づいていける人格を人間に与えてくださいました。そこで、神は人間たちを放置しておくわけにはいきません。むしろ私たちと拘わらざるを得ないのです。

私たちが、私たちを超えたところに人間のまことの支えがあり、命の根拠があるとすれば、それは驚くべきことであり、幸いなことです。私たちは、複眼的な眼を与えられ、生きる意味と価値が普遍で、掛け替えのない尊いものであることに気づかされます。さらに、今置かれている現実と世界に責任をもって生きることが求められます。すなわち、私たちの務めと働きは、この世界を大切に、しかも後世によりよいものを残していく作業が求められます。パウロは、コリントの信徒への手紙一の8章の冒頭で、「愛は造り上げる」と書きました。アガペーは形成する、立ち上げていくのです。建築家が設計図を描き、それに沿って石を積み上げ、形のある構造物を造り出していくかのようです。

大学の使命が学生たちの人格と個性、さらに教養と能力を高めることにあるなら、大学はまさに社会を建てるために貢献する人材を育て、彼らをしっかりと世に送り出す務めをもつ

ています。そのためには何よりも愛が必要です。しかも造り上げる愛が必要です。神のアガペーは人間を造り上げていくと同時に、社会をも造り上げていきます。私たちのキリスト教教育は、測りがたく大きく、尊い使命を負っています。それに応えるために、人間社会の価値と知見だけではなく、造り、建てる神の愛を知り、ここに学んでいくことが不可欠です。引き続き、聖書に学び、神に導かれ、学生たちの成長に資する歩みを続け、何よりも私たちが建てられ、造り上げられていく謙虚さと努力を惜しまないように努めたいと願うものです。

2014 年度
第 59 回教職員修養会報告

第 59 回東北学院大学教職員修養会プログラム

期 日 2014 年 9 月 3 日（水）～9 月 4 日（木） 1 泊 2 日

会 場 宮城蔵王ロイヤルホテル

〒 989-0916 宮城県刈田郡蔵王町遠刈田温泉字鬼石原 1-1

TEL 0224-34-3600

主 題 『聖書に聴く』

講演題 『キリスト教学校の使命とこれからの歩み』

講 師 佐藤東洋士先生

（桜美林学園理事長・桜美林大学総長、キリスト教学校同盟理事長）

9 月 3 日（火）

9:00 土樋キャンパス正門前より送迎バス出発

10:00 受付

10:30 開会礼拝

学長挨拶

講師紹介

11:00 講師講演

12:00 質疑応答

12:25 オリエンテーション

12:30 昼 食

13:30 各部屋チェックイン

14:00 グループ懇談『講師講演をめぐって』

15:00 休 憩

15:30 全体懇談「デフォレスト館の歴史的意義」

櫻井一弥先生（工学部教授）

18:00 夕 食

9 月 4 日（水）

7:00 朝食

チェックアウト

9:00 朝拝

10:00 大学教育の「質的転換」とCOC採択の意義

斎藤誠先生（学務担当副学長）

全体協議・報告会

12:00 閉会礼拝

閉会挨拶

12:30 昼食

13:30 解散 ホテル前より送迎バス出発

14:30 土樋キャンパス正門到着

第 59 回東北学院学院大学教職員修養会開会礼拝奨励

【開会礼拝】

讃美歌：539

聖書：コリントの信徒への手紙Ⅰ 第1章18節～25節

説教題：『十字架のことば』

讃美歌：262

学長
松本 宣郎

十字架の言葉は、滅んでいく者にとっては愚かなものですが、わたしたち救われる者には神の力です。それは、こう書いてあるからです。

「わたしは知恵ある者の知恵を滅ぼし、賢い者の賢さを意味のないものにする。」

知恵のある人はどこにいる。学者はどこにいる。この世の論客はどこにいる。神は世の知恵を愚かなものにされたではないか。世は自分の知恵で神を知ることができませんでした。それは神の知恵にかなっていません。そこで神は、宣教という愚かな手段によって信じる者を救おうと、お考えになったのです。ユダヤ人はしるしを求め、ギリシア人は知恵を探しますが、わたしたちは、十字架につけられたキリストを宣べ伝えています。すなわち、ユダヤ人にはつまづかせるもの、異邦人には愚かなものですが、ユダヤ人であろうがギリシア人であろうが、召された者には、神の力、神の知恵であるキリストを宣べ伝えているのです。神の愚かさは人よりも賢く、神の弱さは人よりも強いからです。

今日から二日間山麓の地に、街の生活から引き退いて教職員修養会をもつことができ、そして今、開会の礼拝を始める事ができて感謝しております。

過去を振り返り未来を見つめるとよく言います。今がその時であろうと間違いなく言えるのですが、過去を振り返るといふ以上、過去は後ろにある、ということになります。未来を振り返るとは日本語では言いません。従って、未来は私たちの目の前にあって、過去は後ろにあるというイメージです。このことを少し考えてみたいと思います。有名な彫刻家であり詩人であった高村光太郎(こうたろう)、本名はみつたろうと言うようですが、高村の詩で誰でも知っている詩、私の中学校時代、生徒手帳に書いてあった詩です。「僕の前に道はない、僕の後ろに道はできる。ああ、自然よ、広大な父よ」と続きます。高村にとってやはり未来は前にあった、まだ踏み込んでないから道はない、後ろに、過去に道はできると言っています。このように未来は前、過去は後ろというのは、私たちによく慣れたイメージのように思うの

です。しかし、少し言葉の上で考えてみますと、今日は9月3日ですが、9月6日の未来のことについては、「三日後に会いましょう」、「三日後に行政管理学会があります。」という言い方をします。で、8月31日は四日前という言い方をします。昔は、過去が前であると認識していた、だから言葉の上でこのようになったのではないのでしょうか。

英語もそうではないのでしょうか。未来になる three days later は、「三日後に」、です。過去の two days before は、「二日前に」、です。ある人の話では、アフリカの民族の時間感覚で、未来というのは自分達の後ろにある、過去だけが目の前にある、目の前にあるのは過去だけだ、我々は後ろ向きに未来へと歩いて行く、そういうことをかなりはっきり意識している、ということです。言葉ができるのは人類の歴史上相当早い段階ですから、思想や哲学、社会の生まれる前に、社会と言葉とどちらが先なのかは問題があるかもしれませんが、その段階では、今申したように、ヨーロッパでも日本でも、未来のことは後ろにある、過去のことは前にあるという観念が実はあった、それが今の私たちのように、未来が前になった、つまり逆転したのではないかということは、多少推測できます。

たしかにそういうふうに言いますと私たちは明日のことはわからないわけですから、三日後に行政管理学会があるといっても、この私が明日突然死ぬこともあるわけですから、それを経験することはできないという意味で明日は真っ暗、何もわからないということになります。もっとも、これが今日の本題ではなくて、私たちは前に向かって歩いていくと普通に言うのですが、目に見えるのは過去のことだけです。過去のことを見つめ、そして経験値として後ろ向きであれ、先へ向かって行こう、過去のことがよくわかればわかるほど先の不安も取り除かれるのではないか、そういうふうを考えてこの時を過ごしたい、そのように思っています。

さて、今日与えられた聖書の箇所、非常に衝撃的な言葉が書いてあると思います。パウロがそうでしたが、最初のキリスト教徒たちは周囲の人たちにイエス・キリストの教えを宣べ伝え、そのことを自分たちが信じ、今日の言葉で言うとそれを宣教していこうと言っていました。しかしそれは信じない人々、はじめてその言葉を聞く人々にとっては、つまりきであり、愚かであったというのです。それをあえて私は必死で語り続けてきた、あなた方の目の前にあるこれまで知られていた知恵は知恵ではない、そのように言わなければならなかった、というのです。ユダヤ人にはつまりきであった、これは一種レトリックの表現なのでユダヤ人にとっても愚かであってもよかったのかもしれないのです。ユダヤ教徒たちがあのイエスを神の子だとは認めないで、ローマに訴えて裁判にかけてあざ突って死に追いやった。そのユダヤ教徒たちにとってはパウロたちがあのイエスこそ神の子であったということは、自分たちのやったことを全く否定するのかという意味でつまりきであったということが出来るだろうと思います。

ギリシャ人にとって、これはローマ人と言ってもいいと思いますが、要するにユダヤ教徒でない多神教徒であった人たちにとっては、十字架の言葉は愚かだったのです。この愚かとは、あほらしくて聞いていられないということですから、パウロの語ることは全くナンセンスだというふうにローマ人には捉えられたのです。どこが一番愚かだったのか、ポイントはどこにあるかと言えば、いろいろな観点で言えます。すなわち、弱い病人とか貧民とか女性とかそういう人たちがばかりのことを考えていた愚かなやつだということもあったでしょうが、もう一つヒントになるのは使徒言行録の中でパウロが、ローマ人のしかるべき地位にある総督に呼ばれて、おまえが言っているキリスト教とか、あるいはイエスとかいう人の話をしてみると言われて、パウロは自分の回心から始めて、自分たちの信仰の内容を話すわけです。かなり話が進んだところで、神の子キリストは、十字架につけられたけれども三日の後に死から甦った、というところまで話がきた時、総督は「もう聞いてはいられない、止めろ、出て行け」というので、おそらく最大の愚かさとは、非常に現実主義と思われるローマ人やギリシャ人にとっては、死んだ者がなんで生き返るんだということだったということは理解しやすいところです。それをパウロは象徴的に十字架の言葉と言ったのです。神を蔑ろにする者だと断罪されて有罪となって十字架で惨たらしい殺され方をしたが甦ったという意味を込めての十字架の言葉だということです。

昨年当学院に来て講演して下さった佐藤研さんという新約学者がいます。この方の『旅のパウロ』という、岩波から出ている本の中で、印象的に語られている点をちょっと引用させていただきます。十字架というのはキリスト教の歴史、そしてキリスト教学校の中で、非常に美しいシンボルとなっています。ベギー葉山の「学生時代」の歌に、「ろうそくの火に輝く十字架を見つめて」、というくだりがあったりして、とても美しい。この部屋にも十字架のペンダントをなさっておられる方がいるかもしれません。ノンクリスチャンの女性、あるいは男性も、十字架のペンダントをわりとおしゃれで使いますけれども、実はそうではなかったのです。パウロにとっては、そんなきれいな美しい清らかなイメージをもつものではなかったのです。キリストが十字架で惨たらしく、さらし者にされて、脇を槍でつかれて、ついに非業の死を遂げたのが十字架の上だったのです。パウロに焼きついたイメージは、とてもとてもろうそくの火に輝く美しい十字架などではありませんでした。だから佐藤氏はこの十字架という言葉をあえてもっとおどろおどろしい言葉で言い直したほうが、パウロの気持ちには合うと言っています。佐藤氏が考案した言葉は、“コウサツチュウ”、“こう”は木偏の「杭」という字、“さつ”は「殺」という字、“ちゅう”は「柱」です。そういうイメージがある以上、「杭殺柱」の言葉はギリシャ人やローマ人にとっては愚かなものでした。非常に分かりやすいものだった、と言うのです。

このようなキリスト教を宣べ伝えるメッセージは当時の社会の中では、なかなかそのまま

では受け入れ難いものであったということです。イエスという人間が本当は神の子であったと、それは神ご自身がこの世界に来て、何の為に来たかと言うと、悩みを持ち、苦しみをもち、生きても最大限 70、80 才で死んで、あとは何も残らない、そういう人生しかないと思っ込んでいる人たちに、とくに苦しみ、悩み、貧しさを担っている人たちに対して、イエス・キリストはこのように杭殺柱で殺されたけれども、復活し、しかもそのキリストの死と復活は、人類の罪を贖って人間の救いを保障するものだったと伝えられたのです。これを受け入れることは、人間が死なないというわけではないけれども、死ぬということはそれで終りではない、キリストの例にならって必ず復活する、その望みを抱いて死ぬことができるのだ、というメッセージでした。ここに大きな転換というか、福音のメッセージがありました。十字架、杭殺柱の死は、しかし人類の罪の贖い、救いだというこの大変なパラドクスを伝えたということです。それを受け入れた者がクリスチャンになっていきました。それは遅々たる歩みではあれ、300 年で古代地中海世界に広がり、そしてヨーロッパへ、というかたちで 2000 年のキリスト教の歴史は、まさにその逆説を宣べ伝え続けて、人々を説得しました。説得させたのは、人かもしれないけれども、それは神の教えがそうさせたのです。そのようにして教会の歴史、キリスト教の歴史があるということです。

それから 1500 年経って、日本にもキリスト教が伝えられました。日本のキリスト教の受け入れ方というのは、最後に申しますけれども非常に独特なものがあったと思います。今、大河ドラマで、ちょうど折しもクリスチャン大名の黒田官兵衛が、そして高山右近が、豊臣秀吉の前に、キリスト教徒として風前の灯というところになっているわけですが、当時のたぶん九州から西日本にかけてのキリスト教徒は、現在の日本の総キリスト教徒よりも多く、何万、あるいは何百万というところでありました。ところが数十年を経てほとんど壊滅、消滅してしまったという歴史を持ちます。しかし、その後ごくわずかのキリシタンが長崎にいたとしても、日本最初の宣教は終わりました。ようやく徳川の終りになって開国への流れの中で、アメリカが中心でしたけれどもヨーロッパも、ロシアも、あるいはイタリアから、あとフランスからもカトリックが来る。そのようなかたちで新しいキリスト教の日本における歴史が始まった。その中でキリスト教としては、再び同様に愚かな十字架のことは伝えなくてはならなかったということです。

その先人のことを我々は伝え聞き、そしてじつは東北学院もそのようなかたちでスタートしたというわけです。日本に入ったキリスト教が 16 世紀で挫折したのに、19 世紀末以後のキリスト教が今に至るまで存続しているということのひとつの意味は、そのキリスト教宣教がキリスト教学校、教育と結びついたということがかなり大きいのではないかと思います。教会だけではなく、1858 年頃に最初のクリスチャンが生れて、そのちょっとあとの世代に押川たちが洗礼を受けて、そして 1880 年代になって東北に入ってきて教会を最初につくっ

たわけです。仙台教会が最初にでき、1886年、明治19年に仙台では最初のキリスト教の学校ができ、宮城女学校ができ、そしてさらに他の教会ができていくということになりました。そして日本各地にも学校を建てるという働きが広がります。東洋英和についてはカナダから来た宣教師が取り組みましたが、これがまたNHK朝のドラマになっているわけです。

今日、講師としてお越し下さった桜美林学園理事長の佐藤先生の桜美林ではありますが、その創設者は清水安三先生であり、その奥様、郁子さんと聞いております。このお二人がアメリカのオベリンで学んで、その名前をつけた学校であります。偶然かもしれませんが、桜美林を建てられた清水安三先生がお生まれになった年が1886年、明治19年であり、ちょうどその年に仙台神学校ができたというわけであります。ついでに偶然ながら、佐藤東洋士先生と私とは全く同じ年の生れであります、それはどうでもいいことでありますけれども、話を戻しまして、その愚かな言葉を、しかし教育と結びつけて、キリスト教学校は聖書に加えて、英語その他もろもろの、もろもろのというと、語弊があるかもしれませんが、子女に教育を施す根幹を十字架の愚かな言葉に据え、日本の教育レベルを上げるという貢献を果たしたのです。ここに一つの道を見出したということに、非常に大きな意味があったらと思うのです。

それ以後も、キリスト教学校は増え、今現在はプロテスタントの学校教育同盟に参加するものが90いくつもあるのです。カトリックを加え、あるいはそこに入らないキリスト教を称する学校を加えると、もっともっとたくさんある。ところが、日本における洗礼を受けたクリスチャンの数というのは1%と言われ、今はひょっとしたら0.8%とかで、もっと低いかもしれないのです。このパーセンテージは、明治の初期とか、第二次大戦後直後というような時期にはもっと多かったかもしれませんが、ほぼ一貫した数字です。しかし考えてみますと日本にあるおそらく100、カトリックを入れれば200近い学校がありますが、毎年何十万人という、在学中何年か聖書を読み、讃美歌を歌い、説教を聞いた人たちを社会に送り出しているというわけです。そのような中で実際に洗礼を受けたクリスチャンは1%、私はこのギャップというところに、日本に19世紀末に来たキリスト教の今や150年に及ぶ歴史を刻んで来た、一つの理由があるように思います。そこに神のご計画があったのかなというふうにも思うわけです。私たちキリスト教学校はともかくある段階で社会的、世間的、世俗的には愚か、あるいはつまずぎと思えることを宣べ伝えているということを根幹においています。しかしその中で教育と言う面で社会と深く関わって生きてきたのであります。その過去を見つめ、したがって豊かな恵みの歴史を持っている可能性は秘められている1%、すべてのキリスト教学校の卒業生だともっと多く、数%になると思う、そのような過去をしっかりと見つめ、後ろ向きにこだわらず前を向いて歩むように、私たちの学校は命じられているのであります。お祈りをいたします。

<祈り>

尊いご在天の神様、今年の東北学院大学の教職員礼拝を豊かな恵みのうちに始めることができ、ありがとうございます。どうぞ十字架のことばを、たとえ愚かであれ、語り続け、教え続けているキリスト教学校をこれからもお守り下さい。そこに働きますもの一人一人をどうぞお強め下さり、それぞれの場で良き働きがなせるように、あなたがいつもそばにいて下さい。この修養会の時に招かれて来られた佐藤東洋士先生の上に、豊かな祝福をお与え下さい。この願いと感謝を主イエス・キリストの御名によってお祈りいたします。

アーメン。

主題講演

「キリスト教学校の使命とこれからの歩み」

佐藤東洋士 先生

講師略歴

さとうとよし
佐藤東洋士

北京生まれ

生年月日 昭和19年8月13日

学校法人桜美林学園理事長・桜美林大学総長

学歴

桜美林大学文学部英語英米文学科卒業

日本大学大学院文学研究科英文学専攻修士課程修了

兼職

文部科学省大学設置・学校法人審議会会長

文部科学省中央教育審議会大学分科会委員

文部科学省学校法人運営調査委員会委員

キリスト教学校教育同盟理事長

世界大学総長協会（IAUP）会長

日本私立大学協会副会長

大学基準協会副会長

日本高等教育評価機構理事

大学評価・学位授与機構大学機関別認証評価委員会委員

著書

「新しい日中関係への提言－環境・新人文主義・共生－」（はる書房、2004年）

「東アジア共同体の可能性－日中関係の再検討－」（御茶の水書房、2006年）

「日本と中国を考える三つの視点－環境・共生・新人文主義－」（はる書房、2009年）

主題講演「聖書に聴く」 「キリスト教学校の使命とこれからの歩み」

キリスト教学校教育同盟理事長 桜美林大学学長
佐藤 東洋士

1、はじめに

おはようございます。ただいまご紹介いただきましたキリスト教学校教育同盟理事長の佐藤です。本日は、大切な修養会の講師としてお招きいただきましたことを大変光栄に思っています。理事長・学長の松本宣郎(まつもと のりお)先生、院長の星宮望(ほしみやのぞむ)先生はじめ、お集まりの皆様に先ず心からの感謝を申し上げます。

東北地方では、8月の下旬から既に新学期が始まっていると伺っていますが、今年は日本の各地を豪雨が襲い、それぞれの地では甚大な被害が発生した夏となってしまいました。ここ数年、毎年のように「異常気象」という言葉を目にしますが、その激しさは年々増しているようです。東北地方の皆さまにとっては、自然災害は我が事のように感じられたのではないのでしょうか。なぜ、このような自然災害が頻繁に起こるようになったのか、私たちは何を大切にしなければならないのか、様々なことが問われているように感じた夏でした。「神を畏れて知恵を得よ」との御言葉に私たちは謙虚に耳を傾け、本当に大切なものを見失うことなく、新しい学期を歩み出したいと願っています。

少し話がそれるかも知れませんが、私の祖父は、長年、松本宣郎先生の前職と同じく、東北大学で教員をしておりました。祖父は元々、1887年に四国、徳島で生まれたのですが、東京帝国大学で学んでいる時に、弓町本郷教会で海老名弾正牧師より洗礼を受けたキリスト者でした。東北大学では、約10年間、教授として教育、研究に携わっていたようですが、その後、「イエスの僕会」を立ち上げ宣教活動にも熱心に取り組んでおりました。東北大学で教授をしておりましたのは、1914年(大正3年)から1924年(大正13年)にあたります。ちょうど「社団法人東北学院」として歩み出された頃の皆さまとは、ずいぶんと関係を持たせていただき、またお世話になっていたのではないのでしょうか。ですから、佐藤家の一員としましては、その東北の地からお招きいただきましたので、何があっても馳せ参じなければと願

い、今日は参った次第です。

さて、今日、我が国においては、キリスト教学校はもちろんのこと、いずれの高等教育機関、中等教育機関、さらに幼児教育機関に至るまで、どこも大変な時代を迎えています。

けれども、押川方義(おしかわまさよし)先生、ウィリアム・E・ホーイ先生が、キリスト教伝道者養成の目的をもって仙台市木町通に「仙台神学校」を開設された時代も別の意味で多くの困難、試練があったことでしょう。ゼロから新しいものを造り上げることは本当に大変なことだったと思います。しかし、現在、私達が直面している問題とは全く違ったものであったと理解しています。時代、時代によって様々な困難、試練に私たちは直面します。まさに3年前に未曾有の大震災を経験された皆さまですから、それは十分にご理解いただけることだと思います。近年、私達は少子高齢化の時代を迎え、学生、生徒をどのように確保するか、また我が国においても世界中の高等教育機関が進学先として捉えられるようになった社会で、今後どのように学校を維持、発展させていくか、私達はいくつもの難題、課題を抱えています。あるものを維持し、それをその時代、時代にあったものに発展させていくことは、ケースによってはゼロから造り上げるよりも時には大変な労力を必要とします。

ただ、私達はキリストの御名によって建てられた学校に勤めているのです。その私達がなすべきことは、これからも常に御言葉に聴き、そして、希望をもって新しい時代を切り拓くために、謙虚に先人の足跡から時代を超えて語り継がれるべきものを掘り起こし、受け継ぎつつ、自らのうちに今の時代の文脈に沿った新しさを創造していくことなのではないでしょうか。そういった意味で、今日は、皆様と共に、東北学院の過去を振り返りつつ、今の時代にあって、どのように良き伝統を継承しつつ、それを未来につなげていくか、その可能性をご一緒に探ることができればと願っています。

それではまず、現在、私が理事長をしていますキリスト教学校教育同盟の現状からご紹介したいと思います。

2、キリスト教学校教育同盟の加盟状況

この表をご覧いただければおわかりのように、現在、同盟に加盟している法人は98法人あり、設置校別にみますと大学は55大学、短大が23短期大学、そして、高校が93校、中学校が76校という状況です。学生・生徒数は、大学が約23万人、短大が約9千人、中高では約9万2千人となっています。

【表1：キリスト教学校教育同盟の学校数】

大学	55
(大学院)	(43)
短大	23
専門学校	7
高校	93
中学校	76
小学校	33
学校法人数	98

【表2：キリスト教学校教育同盟加盟学校法人の設置校数一覧】

大学	短大	専門学校	高校	中学校	小学校
A 愛農学園				1	
B 青山学院	1	1	1	1	1
B 梅花学園	1	1	1	1	1
C 積西学院	1	1	1	1	1
D 同志社	2	2	1	4	4
F フェリス学院	1	1	1	1	1
福岡女子学院	1	2	1	1	1
G 普通土学園				1	1
G 岐阜経済学院	1	1	1	1	1
H 平和学園				1	1
聖坂学院				1	1
日ノ本学園				1	1
弘前学院	1	1	1	1	1
広島女子学院	1	1	1	1	1
広島三育学院				1	1
北陸学院	1	1	1	1	1
北星学園	1	1	1	3	1
I 道愛学院				1	1
茨城キリスト教学園	1	1	1	1	1
和泉短期大学				1	1
J 自由学園				1	1
女子学院				1	1
K 関西学院	1	1	1	2	2
関東学院	1	1	1	2	2
25	14	17	9	31	26

大学	短大	専門学校	高校	中学校	小学校
活水学院	1	1	1	1	1
啓明学園				1	1
啓明学院				1	1
恵泉女子学院	1	1	1	1	1
敬和学園				1	1
金城学院	1	1	1	1	1
キリスト教聖真実高等学校				1	1
基督教独立学園				1	1
神戸女子学院	1	1	1	1	1
国際基督教大学	1	1	1	1	1
香園女子学院				1	1
共愛学院	1	1	1	1	1
九州学院				1	1
九州ルーテル学院	1	1	1	1	1
L ルーテル学院	1	1	1	1	1
M 松山学院	1	1	1	1	1
松山東雲学園	1	1	1	1	1
明治学院	1	1	2	1	1
宮城学院	1	1	1	1	1
桂山学院	1	1	1	1	1
盛岡大学	1	1	1	1	1
N 長崎学院	1	1	1	1	1
名古屋学院				1	1
名古屋学院大学	1	1	1	1	1
24	11	16	2	22	15

大学	短大	専門学校	高校	中学校	小学校
N 新島学園			1	1	1
日本福祉学校			1	1	1
O 桜美林学園	1	1	1	1	1
沖繩キリスト教学院	1	1	1	1	1
沖縄三育学院				1	1
近江兄弟社学園				1	1
折尾聖真学園				1	1
折尾聖真学院				1	1
大阪女子学院	1	1	1	1	1
大阪キリスト教学院	1	1	1	1	1
大阪YMCA	1	1	1	1	1
P フール学院	1	1	1	1	1
R 藤農学園	1	1	1	1	1
立教学院	1	1	2	2	1
立教女子学院	1	1	1	1	1
桐城学院	1	1	1	1	1
S 三育学院	1	1	1	1	7
聖望学園				1	1
聖学院	1	1	2	2	1
聖光学院				1	1
清教学園				1	1
西南学院	1	1	1	1	1
西南女子学院	1	1	1	1	1
聖隷学園	1	1	1	1	1
聖書学園				1	1
聖ステパノ学園				1	1
25	9	11	10	2	20

大学	短大	専門学校	高校	中学校	小学校
清和学園				1	1
四国学院	1	1	1	1	1
清水国際学院				1	1
静岡英和学院	1	1	1	1	1
姫路英学院				1	1
近畿女子学院				1	1
松嶺女子学院	1	1	1	1	1
尚絅学院	1	1	1	1	1
捜真学院				1	1
玉川聖学院				1	1
T 東北学院	1	1	2	1	1
東京女子大学	1	1	1	1	1
東京キリスト教学園	1	1	1	1	1
東京神学大学	1	1	1	1	1
東亜聖堂				1	1
東洋英和学院	1	1	1	1	1
U 浦和ルーテル学院				1	1
Y 山形学院				1	1
山梨英和学院	1	1	1	1	1
八代学院	1	1	1	1	1
横浜英和学院				1	1
横浜学院				1	1
横浜共立学園				1	1
横浜聖学院				1	1
24	9	11	2	0	20
88	43	55	23	7	93

<出典：キリスト教学校教育同盟加盟学校名簿2014より筆者作成>

【表3：大学・短期大学のキリスト教学校学生数】

2012（平成24）年度の大学学生数

	日本カトリック学校連合会	キリスト教学校教育同盟	計	全国大学
学校数	20	55	75	783
学生数	約41,338	234,925	276,263	2,876,134
学生数割合	1.4%	8.2%	9.6%	100%

2012（平成24）年度の短期大学学生数（短期大学部含む）

	日本カトリック学校連合会	キリスト教学校教育同盟	計	全国短期大学
学校数	16	24	40	372
学生数	約5,343	9,362	14,705	141,970
学生数割合	3.8%	6.6%	10.4%	100%

学生数の出典：日本カトリック連合会については筆者調べ。キリスト教学校教育同盟は公表数。
全国数は平成24年度学校基本調査による。

大学だけに絞ってみますと、現在、我が国に私立大学は、576 大学ありますので、約 1 割がプロテスタント系のキリスト教学校となります。カトリック系の大学は、現在全国に 18 大学ありますので、これを合わせると 74 大学となり、13% もの大学がキリスト教学校ということになります。そこに在学する学生たちは、在学中、何らかの形で聖書に触れ、讃美歌を歌う機会が与えられる訳です。これはクリスチャン人口が約 1% と言われている我が国において、ある意味、驚異的な数字だといえるのではないのでしょうか。

【表 4：日本カトリック学校連合会 大学連盟】

日本カトリック学校連合会

大学連盟		
1	北海道	藤女子大学
2		天使大学
3	宮城	仙台白百合女子大学
4	東京	上智大学
5		聖心女子大学
6		清泉女子大学
7		白百合女子大学
8		東京純心女子大学
9		清泉女学院大学
10	愛知	南山大学
11	京都	京都ノートルダム女子大学
12	兵庫	神戸海星女子学院大学
13	岡山	ノートルダム清心女子大学
14	広島	エリザベト音楽大学
15	愛媛	聖カタリナ大学
16	長崎	聖マリア学院大学
17		長崎純心大学
18	鹿児島	鹿児島純心女子大学

ただ、キリスト教学校であるかないかを問わず、どちらの教育機関も経営には大変厳しい時代を迎えています。7 月には横浜英和が青山学院の系列校になるとの報道がなされたから、そのことは皆さんもご存知のことと思います。既に兵庫県の聖和大学が 2009 年に関西学院と合併しましたし、2005 年には平安女学院大学が守山キャンパスをキリスト教とは全く関係ない立命館に譲渡するということもありました。キリスト教学校の多くは、規模の小さな学校ですから、生き残りをかけて、これから様々な統廃合が進むのではないかと考えています。

事実、キリスト教学校教育同盟の総会、代表者協議会、各地区での研修会では、大規模校

を中心とした連携や連帯の可能性が討議されています。特に東北学院が属されている、東北・北海道地区では、2011年以來、震災後の世にあってキリスト教学校がどのような役割を果たせるか、「共に生き、共に歩む」ことを大切に受け止め、真剣に協議されています。どんなに小さな存在であっても、同じ主の御名によって建てられた学校として、助け合える仲間がいる、支え合える友がいることは、どれほど心強いことでしょう。

3、キリスト教学校をとりまく状況

また、中高においては、「道徳教育の教科化」の問題にも直面しています。キリスト教学校として、どのように取り組むべきか、一学校だけではなかなか見いだせない結論を、同じ精神に立っている学校が集まり、知恵を出し合い、これからの道、方策を探ることができますことは多いに勇気づけられることです。

もちろん、「道徳教育の教科化」だけでなく、今日、我が国においては、新聞等でもご承知の通り学校教育法改正及び大学ガバナンス改革の話題が上っており、政府は様々な改革をしようとしています。学校法人としては大学改革のみならず設置校全体の教職員が一体となって改革に当たらなければなりません。

戦後、順調に数的規模を拡大してきた私立学校ですが、上記のことばかりでなく、社会的には、様々な問題に直面しています。なかでも深刻な問題は18歳人口の減少による学生募集への影響です。当然ながら、キリスト教学校にもその影響が及んでおり、100年以上の歴史を刻んだ伝統のあるキリスト教学校ですら、厳しい状況に置かれ苦戦しています。

4、教育機関（大学）のおかれている我が国の社会状況

ここからは大学に焦点をあててお話をさせていただきますが、地方の大学においては、18歳人口の減少に加え、大学の都市集中化により、学生募集がうまくいかない学校が多く出てきています。我が国の人口は、大都市や都市圏は増加、地方都市は微増、それ以外の地域では人口が減少傾向にあり、日本の私立大学も偏在しています。次の表は、全国を13地域に分けた私立大学数の一覧です。この表からも大学が都市部に集中していることが明白です。キリスト教学校は都市部以外にも全国に在し、古くから地元で根ざした教育を行い、社会を支える人材の育成に尽力してきましたが、今日この大学の都市集中化による影響を受けています。

【表5：私立大学の地域別学校数 2008（平成20）年度～2013（平成25）年度】

私立大学数

年度	北海道	東北	北関東	南関東	東京	甲信越	北陸	東海	近畿	京都・大阪	中国	四国	九州	全国計
2008(H20)	23	29	23	74	105	21	11	66	44	70	36	8	55	565
2009(H21)	23	31	22	74	108	21	11	66	44	71	37	7	55	570
2010(H22)	23	32	22	75	111	21	11	63	42	71	37	7	54	569
2011(H23)	23	32	22	75	111	21	11	63	43	73	37	7	54	572
2012(H24)	23	32	22	77	112	21	11	63	44	75	36	7	54	577
2013(H25)	24	32	22	77	111	21	11	62	44	75	36	7	54	576

【表6：短期大学の地域別学校数 2008（平成20）年度～2013（平成25）年度】

私立短期大学数

年度	北海道	東北	北関東	南関東	東京	甲信越	北陸	東海	近畿	京都・大阪	中国	四国	九州	全国計
2008(H20)	18	23	20	40	47	15	10	40	28	45	20	12	42	360
2009(H21)	18	24	20	40	45	15	10	40	28	44	20	11	41	356
2010(H22)	17	23	19	38	43	15	10	38	27	43	20	11	40	344
2011(H23)	15	23	18	38	43	15	10	38	26	42	20	11	39	338
2012(H24)	15	22	17	37	42	15	9	38	25	40	20	11	39	330
2013(H25)	15	22	17	36	38	15	9	38	25	39	20	11	38	323

※北関東は茨城・群馬・栃木、南関東は埼玉・千葉・神奈川、近畿は京都・大阪を除く。

出典：日本私立学校振興・共済事業団私学経営情報センター「私立大学・短期大学等入学志願動向」各年度より筆者加工

学校数は都市部に偏っていることが見られるものの、都市圏以外にも多くの大学があり、地域の高等教育を支えていることが分かります。しかし、私立大学の入学定員計の四大都市圏とそれ以外の都道府県に区分した表をご覧くださいと、大都市圏には大規模の私立大学が多くあるため、入学定員を大都市部とそれ以外に区分すると、一層の偏りがあることが分かります。

【表7：私立大学・短期大学の地域別入学定員(2012（平成24）～2013（平成25）年度）】

私立大学

年度	埼玉	千葉	東京	神奈川	愛知	京都	大阪	兵庫	福岡	四大都市圏の計	左記以外の道県	全国計
2012(H24)	16,407	15,127	162,757	22,438	33,579	32,174	42,502	22,241	18,348	365,573	90,217	455,790
2013(H25)	16,463	15,243	164,704	22,633	33,959	32,350	42,444	22,081	18,289	368,166	87,624	458,456

※ここでの四大都市圏は、関東・近畿地方の7都府県に愛知、福岡を加えたものとした。

私立短期大学

年度	埼玉・千葉・神奈川	東京	東海	京都・大阪	九州	左記以外の 道県	全国計
H24年度	7,485	9,569	7,995	9,635	9,160	25,075	68,919
H25年度	7,215	8,389	7,765	9,190	8,970	24,955	66,504

出典：日本私立学校振興・共済事業団私学経営情報センター「平成 25(2013) 年度私立大学・短期大学等入学志願動向」より筆者加工。

私立大学の入学定員約 46 万人のうち、四大都市圏の大学が 80.3%、約 37 万人の入学定員を持っており、約 8 割の私立大学学生は四大都市圏の大学に在籍していることとなります。2011（平成 23）年の総務省人口推計では四大都市圏の都府県人口の計は全国の 50.8%であるので、人口比から見ても偏りがあることが分かります。大都市圏に位置する大規模大学が増加していることの他に、中堅から上位レベルの大規模大学がその定員規模を拡大していることから、この偏りはさらに強まっていくでしょう。

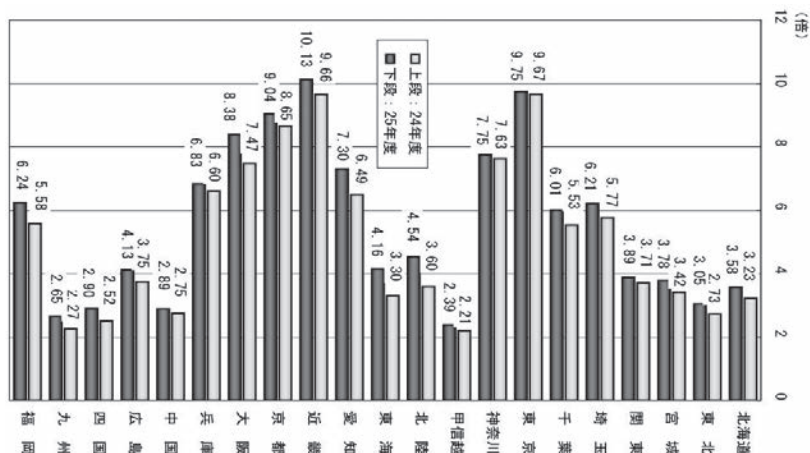
また、首都圏では 70 年代から 90 年代にかけて、都心にキャンパスを構えていた大規模私立大学の多くが、東京 23 区以外の地区や東京近郊にキャンパスを増設しました。これは民間私鉄各社が沿線開発の一環として大学などを招致する動きを見せたことや、文部科学省が都心に大学が極度に集中することを懸念し、都心での学部・学科の増設や定員増の申請を許可せず、抑制する動きをとったためです。

この状況に変化が訪れたのは、バブル崩壊後です。都心の地価が下がったこと、また以前に比べ文部科学省の認可が下りやすくなったことに加え、首都圏でも都心キャンパスにある大学の方が入学志願者増加傾向にあったことから、昨今、都心回帰といわれているほど都内中心部へとキャンパスを移転させる大学の動きがみられます。このことが、首都圏のなかでも、さらに都心部に学生が集まる現状を導いています。

私立大学の場合、補助金や寄付金などによる収入もありますが、学納金が主な収入源となっているのが現状であるため、18 歳人口の減少などにより学生募集の行き詰まりが経営面に大きく影響します。もともと学校法人は非営利目的の法人ではあり、特にキリスト教学校はキリスト教の教えを教育理念とし、重きをおいているため、収入拡大への関心が薄い傾向にあります。しかし、安定した大学経営のためには一定収入を積み重ねていかなければならないのも現実です。

大学の都市部集中化について、述べましたが、それでは次に地域別の志願倍率を見えます。

【図1：私立大学の学部所在地別志願倍率（2012（平成24）～2013（平成25）年度）】



私立大学の入学定員のうち、四大都市圏の大学が8割というのは先ほど申し上げました。地域別の志願倍率も同様に、四大都市圏では高く、それ以外の地域では低い傾向が明らかになります。全体で捉えますと、地域に関わらず2013年度の志願倍率は前年度よりも高くなっており、全国的に私立大学の志願者が増加したことが見て取れます。

【図2：私立大学の学部所在地別入学定員充足率（2012（平成24）～2013（平成25）年度）】

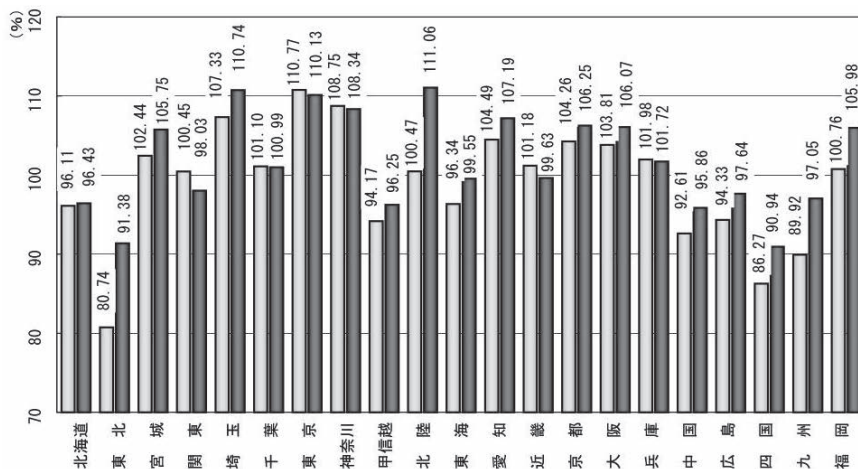


図1・2 出典：日本私立学校振興・共済事業団私学経営情報センター「平成25(2013)年度私立大学・短期大学等入学志願動向」p.16

先ほどの図1では志願倍率の地域別をご覧いただきましたが、次の図では学部の所在する県別の入学定員充足率を見てみます。学校法人にとっては如何に定員を充足させるかという点が経営指標の前提となります。宮城県の私立大学の定員充足率平均は昨年より上回っており回復傾向が見られます。また、宮城県を除く東北地方の私立大学においても全体の数値と

しては91.4%で未充足ではありますが、前年度の80.7%よりもかなり回復していることが分かります。

また、これは十数年前から言われてきたことですが、全国的に見ますと、都市圏を除く中国・四国地方と東北地方の定員充足率が芳しくなく、依然として苦戦を強いられている状況が見取れます。

志願倍率と定員充足率が相関関係にあることは簡単に分かりますが、どう打開すればよいのかという方法論については、残念ながら正解はありません。ですが、やはり厳しい地域にある私立大学であっても、教職員一丸となって良い教育に取り組んでいるところや、大学全体で創意工夫をしながら学生募集に励んでいる大学が定員を充足させているということは言えます。

2008年のいわゆるリーマンショックを契機に、国内の経済状況は落ち込みます。これにより私立大学の学生募集にも影響を受け、全国的に志願倍率の落ち込みが続きました。同時に志願者の地元志向が強くなってきたことが大手予備校や受験情報誌などで分析されているのはご承知の通りです。この地元志向という点について、2013～2014年度学校基本調査の都道府県別大学入学者のデータを整理したのから、地元大学進学率をご覧ください。

【表8：出身高校の所在地県別大学入学者数2013（平成25）～2014（平成26）年度】

2013（平成25）年度

出身高校の所在地	北海道	青森	岩手	宮城	秋田	山形	福島	茨城	栃木	群馬	埼玉	千葉	東京	神奈川
H25大学入学者数	20,273	5,047	4,666	10,287	3,885	4,628	7,961	14,870	9,507	9,112	33,695	28,370	75,771	41,557
地元進学率	69.2%	35.1%	27.7%	57.6%	23.5%	18.9%	19.0%	19.8%	22.3%	29.4%	32.1%	33.9%	64.3%	40.6%
新潟	9,819	4,724	5,554	3,823	5,272	9,316	9,605	17,635	37,572	8,296	6,931	15,136	43,369	28,898
	35.6%	17.4%	43.2%	29.8%	26.3%	16.4%	18.4%	28.2%	72.0%	19.4%	22.4%	49.0%	55.2%	45.3%
奈良	7,899	4,486	2,334	2,770	8,799	14,943	5,042	3,342	4,464	6,316	2,916	22,408	3,540	5,790
	14.6%	10.5%	11.9%	16.6%	43.7%	52.2%	24.1%	37.4%	17.5%	32.4%	18.9%	64.6%	14.7%	34.1%
熊本	7,363	4,333	4,368	6,323	6,225	14,943								
	45.4%	22.3%	25.8%	32.4%	56.2%	-	-	-	-	-	-	-	-	-
全国計														614,183

出典：「平成25（2013）年度学校基本調査」より筆者作成

2014（平成26）年度（速報値）

出身高校の所在地	北海道	青森	岩手	宮城	秋田	山形	福島	茨城	栃木	群馬	埼玉	千葉	東京	神奈川
H26大学入学者数	20,193	5,049	4,662	10,188	3,874	4,456	7,870	14,841	9,086	8,967	32,985	28,249	75,156	41,732
地元進学率	68.4%	35.5%	27.3%	56.9%	23.1%	18.9%	19.3%	19.4%	22.0%	29.3%	31.7%	32.0%	64.6%	40.3%
新潟	9,708	4,584	5,330	3,743	5,116	9,251	9,520	16,965	37,067	8,214	6,727	14,812	44,493	28,882
	34.2%	18.2%	41.9%	29.4%	26.6%	15.4%	18.8%	28.4%	70.6%	20.2%	22.4%	49.8%	54.8%	45.0%
奈良	7,816	4,453	2,083	2,818	8,701	14,533	5,028	3,312	4,513	6,158	2,767	22,541	3,501	5,620
	14.5%	10.8%	11.1%	15.7%	43.0%	53.1%	24.0%	36.2%	16.7%	34.0%	18.6%	63.5%	15.1%	34.0%
熊本	7,459	4,115	4,302	5,995	6,161	14,636								
	45.5%	22.6%	26.5%	32.4%	53.8%	-	-	-	-	-	-	-	-	-
全国計														608,232

出典：「平成 26(2014) 年度学校基本調査(速報)」より筆者作成

参考【表 9：(出身高校所在地)宮城県の大学入学者数】

2013 (平成 25)年度

大学の所在地	北海道	青森	岩手	宮城	秋田	山形	福島	茨城	栃木	群馬	埼玉	千葉	東京	神奈川
H25入学者数	169	576	835	5,922	578	857	908	172	203	121	128	86	195	98
割合	1.4%	4.9%	7.2%	50.7%	5.0%	7.3%	7.8%	1.5%	1.7%	1.0%	1.1%	0.7%	1.7%	0.8%
	新潟	富山	石川	福井	山梨	長野	岐阜	静岡	愛知	三重	滋賀	京都	大阪	兵庫
	141	47	32	10	34	62	14	107	46	7	4	12	34	28
	1.2%	0.4%	0.3%	0.1%	0.3%	0.5%	0.1%	0.9%	0.4%	0.1%	0.0%	0.1%	0.3%	0.2%
	奈良	和歌山	鳥取	島根	岡山	広島	山口	徳島	香川	愛媛	高知	福岡	佐賀	長崎
	11	3	6	3	11	19	3	4	5	19	2	10	1	6
	0.1%	0.0%	0.1%	0.0%	0.1%	0.2%	0.0%	0.0%	0.0%	0.2%	0.0%	0.1%	0.0%	0.1%
	熊本	大分	宮崎	鹿児島	沖縄	その他	宮城計							
	4	4	4	18	15	101	10,287							
	0.0%	0.0%	0.0%	0.2%	0.1%	0.9%	100%							

出典：「平成 25 (2013)年度学校基本調査」より筆者作成

2014 (平成 26)年度(速報値)

大学の所在地	北海道	青森	岩手	宮城	秋田	山形	福島	茨城	栃木	群馬	埼玉	千葉	東京	神奈川
H26入学者数	170	523	807	5,800	553	844	903	201	151	120	146	101	209	95
割合	1.5%	4.5%	7.0%	50.4%	4.8%	7.3%	7.8%	1.7%	1.3%	1.0%	1.3%	0.9%	1.8%	0.8%
	新潟	富山	石川	福井	山梨	長野	岐阜	静岡	愛知	三重	滋賀	京都	大阪	兵庫
	206	49	27	3	29	76	14	106	47	6	11	13	34	28
	1.8%	0.4%	0.2%	0.0%	0.3%	0.7%	0.1%	0.9%	0.4%	0.1%	0.1%	0.1%	0.3%	0.2%
	奈良	和歌山	鳥取	島根	岡山	広島	山口	徳島	香川	愛媛	高知	福岡	佐賀	長崎
	17	4	2	7	8	20	7	4	5	15	3	12	3	8
	0.1%	0.0%	0.0%	0.1%	0.1%	0.2%	0.1%	0.0%	0.0%	0.1%	0.0%	0.1%	0.0%	0.1%
	熊本	大分	宮崎	鹿児島	沖縄	その他	宮城計							
	4	2	4	10	10	96	11,513							
	0.0%	0.0%	0.0%	0.1%	0.1%	0.8%	100%							

出典：「平成 26 (2014)年度学校基本調査(速報)」より筆者作成

少子化と言われているとおり、現在の家庭の多くは子ども 1 人か 2 人がほとんどです。保護者のお気持ちから考えますと、遠く離れたところの大学に進学させるよりも、なるべく家庭から通わせたいという親心は当然でしょう。

また、リーマンショック以降の家庭経済への影響もあり、学費以外の仕送りを継続することが困難になっているご家庭もあろうかと思えます。自宅外通学者への仕送りの全国平均額は月額約 7 万円(注 1)です。首都圏の私立大学においては約 9 万円(注 2)と言われておりますから、学費と合わせますと相当な負担となるわけです。

こういったことから地元進学志向は続いていくと推測できます。

注 1：2013 年、全国大学生生活協同組合連合会による調査。平均の月額仕送りが 72,280 円
で前年比 + 2,670 円。7 年ぶりの増加となった。

注 2：東京私大教連、2014 年「私立大学新入生の家計負担調査 2013 年度」p.9

5、選抜についての考え方

このような状況で、大学は今後の生き残りをかけて、どのようにしていけばいいのでしょうか。これからは、以前のように学力レベルの高い学生のみを受け入れるという方針のもとで生き残れるのは、一握りの大学だけでしょう。近年、学生の学力低下が問題視されておりますが、私達大学人はこの問題を嘆くだけでなく、どのように対応していくべきかを考えなくてはなりません。入学志願者を増やすためには、学力に固執せずに広く学生を受け入れ、大学の学びのなかで社会に通用する人材を育成するという方法にシフトする時期がきているのかもしれない。つまり、これまでの「学生の入学を入口で管理する」という考え方から、「出口での管理」をしていくという発想の転換が必要だということです。受け入れた学生に社会で受け入れられるような付加価値を付けて卒業させるためには、学問探求の場として学問的知識のみを教授するのではなく、さまざまな知識、技術・技能、経験を身につけさせて、出口へと導くようにしなければなりません。

6、大学のガバナンス改革

そのようにシフトしていくには、大学運営に係わる様々な要素、例えば、現行の組織、カリキュラム、施設などをドラスティックに変える必要があります。そのためには、大学の改革を迅速に進めることが重要であります。

皆様ご存じのことと思いますが、来年4月から「学校教育法及び国立大学法人法の一部を改正する法律」が施行されます。これは従前からの教授会による大学運営では、スピーディーでダイナミックな改革等を行うのが難しく、先に述べたような問題を解決していくための迅速な意思決定ができないため、学長に実質的権限を集中させることで、大学が大学としての意思決定を持続的発展のために迅速に行っていくことができるようにするための改正です。この法律は、今後の私立大学の運営の鍵となっていくでしょう。また、この法案により、学長の責任は劇的に大きくなるわけですから、学長はこれまで以上のリーダーシップと決断力を要求されます。つまり、学長の力量がその大学の将来に大きな影響を与えることになるわけです。

参考【表 10】

学校教育法改正(新旧対照表)

新	旧
<p>第92条 ④副学長は、<u>学長を助け、命を受けて校務をつかさどる。</u> (略) 第93条 <u>大学に、教授会を置く。</u></p> <p>② <u>教授会は、学長が次に掲げる事項について決定を行うに当たり意見を述べるものとする。</u> 一 <u>学生の入学、卒業及び課程の修了</u> 二 <u>学位の授与</u> 三 <u>前二号に掲げるもののほか、教育研究に関する重要な事項で、学長が教授会の意見を聴くことが必要であると認めるもの</u></p> <p>③ <u>教授会は、前項に規定するもののほか、学長及び学部長その他の教授会が置かれる組織の長（以下この項において「学長等」という。）がつかさどる教育研究に関する事項について審議し、及び学長等の求めに応じ、意見を述べることができる。</u></p>	<p>第92条 ④副学長は、<u>学長の職務を助ける。</u></p> <p>(略) 第93条 大学には、重要な事項を審議するため、<u>教授会を置かなければならない。</u></p> <p>(新設)</p> <p>(新設)</p>

ところで、一口に「ガバナンス改革」と言っても、果たしてキリスト教学校とそうでない学校の「改革」が全く同じなのでしょうか。もし違いがあるとすれば、「何が違い」、「何を大切に」キリスト教学校は改革を進めなくてはならないのでしょうか。

誤解を恐れずに言えば、私はキリスト教学校の真の頭は、理事長でも院長でもまた学長、校長でもない、私たちの主であると信じています。

私が本務としております桜美林学園の創立者清水安三が、存命中、ある学生から「先生、桜美林大学の特色は何ですか？」と問われたことがありました。その時、清水は即座に「それは、キリスト教学校であるということだ」と答えられたのです。そして、「キリスト教学校とは、学長、校長のみならず、教職員が常に『主ならどうなさるだろうか』を忘れることなく日々の業務にあたり、学生、生徒たちと接することだ」と言葉を続けられました。まさにキリスト教学校のガバナンス改革は、キリスト教学校に勤める誰もが、主を頭としてそのことを常に心に留めて、御言葉に聴きつつ意思決定していく姿勢が大切なのだと思います。

東北学院は、大学だけでも三つのキャンパスを持たれ、それぞれのキャンパスでは多くの学生、生徒を抱えておられます。規模が大きくなればなるほど、様々な意見や考えが行き交

い、一致を見出すことが、時には困難に思える状況が生まれることもあるのではないのでしょうか。その環境の中でどう一致を見出し、スピーディーでダイナミックな改革を実行していくか。それは、何も東北学院の皆様に限らず、多くの教育機関が悩んでいる問題でもあります。

しかし、幸い私たちは唯一の主イエス・キリストを頭とする学校に勤めているのです。常に主が共にいてくださるのです。そして聖書を通して日々語りかけてくださっています。教職員一人一人がその御言葉に聴き、「主ならどうなさるだろうか」を常に念頭に置いてガバナンス改革に取り組む時、私はたとえ三つのキャンパスに分かれていても、またどんなに大きな規模の学校であっても、方向性の一致を見出して改革に取り組むことができると信じています。

7、グローバル人材の育成

少子高齢化や大学の都市部集中化の他に、我が国の大学の課題として、昨今よく言われているのが「グローバル人材の育成」です。一方で、我が国の若者の海外離れが問題となっています。学生が、語学や外国の文化、教育、政治などに興味を持つことは、グローバル人材となるために重要な要素です。文部科学省からも数々の支援プログラムが出されていることから、その重要性がわかります。

大学は、先ほども申し上げたように「出口での管理」をしていくという意識を持ち、卒業するまでのカリキュラムの中で外国語能力を伸ばし、また海外留学や外国との交流の場を増やすようにしていくべきでしょう。多くの大学が既に、学生のレベル別による外国語の授業や少人数制授業、カリキュラムそのものに留学を組み込むなど、グローバル人材育成の推進に力を入れておりますが、今後も更なる推進が必要です。

さらにこれからは、外国語が堪能であったり、海外での経験を有するという意味での「グローバル人材」から、もう一步先に進んだ「グローバル人材の育成」が必要とされる時代だと思っています。もう一步先に進んだ「グローバル人材」とは、自分のコミュニティーが抱えている問題はもちろんのこと、自分が属さないコミュニティー、そして世界が解決できずに抱えている問題の解決の糸口を見つけることができる人材です。そして、その問題を共に解決する仲間を作ることができる人材です。そのためには、まず自分自身や自分を取り巻く社会をよく理解し、そして次に自分とは異なる文化を持つ人やコミュニティーを理解し、お互いを認めることが必要です。そういった能力を学生に身に付けさせるような場を、大学は学生に提供していくべきだと思います。

ほんの一例ですが、国連アカデミック・インパクト(UNAI)の学生組織である ASPIRE の日

本組織が、ASPIRE Japan として 2012 年に桜美林大学が中心となって発足し、活動を継続しています。学生は様々なフォーラムや国際学会などで、レクチャーを受けたりディスカッションをするのですが、そのトピック自体を決めるのも学生たち自身です。これまでに挙げたトピックは、「持続可能な国際協力の模索」、「各国の高等教育機関の長所や短所の理解を通じ、学生目線から教育改革につなげる意見を提案」、「教育・文化・環境について各国間ギャップや共通点を学ぶ」などです。これらのトピックを知らされたとき、真のグローバル人材の育成に光が射したように感じました。こういった活動を支援し、広げていくことが大学に求められていると思います。

他者の文化やコミュニティーを理解し、お互いを認め合うことは、キリスト教の精神の基盤となる「隣人愛」と根底にある考えは同じです。キリスト教学校はそれぞれに建学の精神をもっていますが、どの建学の精神も根底にあるものは同じだと考えます。つまりキリスト教学校は、その建学の精神を尊重し貫くことが、おのずと真のグローバル人材を育成することになるのだと思います。

8、建学の精神の共通理解

さて、ここまで大学をとりまく厳しい現状について皆様と共に見て参りましたが、たとえばどのような状況にあってもキリスト教学校は、希望と勇気をもって歩み続けることができると私は信じています。私達の先人たちもまた、多くの困難、試練を乗り越えてこれまで学校の歴史を築き上げて来られました。

東北学院大学はその長い歴史のなかで、世界大恐慌、第二次世界大戦などの試練に直面し、物的にも金銭的にも厳しい状況下におかれるなか、押川先生、ホーイ先生、シュネーダー先生等は、数々の苦難を乗り越えてこられました。先生方のことをご存知の皆様なら、先生方が祈りを忘れることなく、建学の精神と今日の福音を守られ、苦難を乗り越えたその志と歴史を受け継がれる力をお持ちだと信じています。

東北学院は 2011 年に、千年に一度とも言われた東日本大震災で大きな被害に遭われ、試練に直面されました。また、その 3 年前の震災では、学院に関わる何人もの皆さまの尊い命が奪われ、また被害に遭われた方々がいらっしゃいましたことを覚え、改め心からの哀悼の意を表しますと共に、お見舞い申し上げます。もちろん東北学院のみならず、東北各県では多くの犠牲者が出、今もなお、明日の見えない日々の中で、嘆きと苦しみの中に多くの方々がおられます。その渦中にあるキリスト教学校として、どう現実や人々と向かい合い、立ち続けなければならないか、そのことはここにお集まりの皆さまが誰よりも日々、感じられておられることと思います。

私は、本日、ここにお招きいただくにあたり、頂戴しました、この「After3.11 東日本大震

災と東北学院」を改めて読ませていただきました。皆さまのお働きには本当に頭の下がる思いです。皆さんは見事にこの3年間、震災後の社会、人々と関わり続け、尊い働きをなしてこられましたことを、改めて、高い席からではありますが、心からの敬意を表したいと思います。まさに皆さまの働きの中に、「希望」を見出した思いです。しかも自己はもとより、家族や学校でさえ大変な時に、自分たちの学校のみならず、支援の受け皿として多くの大学からの支援者を受け入れ、またコーディネートされてこられました。東北学院がキーステーションになってくださったからこそ、多くの学生たちが互いに支え助け合うことの大切さを学び、また、新たなネットワークを構築できたのだと感じています。実は、桜美林学園からも多くの学生、教職員がお世話になっております。2011年から現在まで、述べ約300名の学生、教職員が皆さまと共に支援活動に参加させていただき、今夏も、14名がその活動に参加させていただいていると報告を受けております。この場を借りて理事長として改めて御礼申し上げます。

まさに先人から受け継がれた「人と社会に仕える」という建学の精神を、学生・教職員の皆様が十分に理解され、「地の塩、世の光」となるべく精神が皆様のなかに根付いているからこそだと思っています。キリスト教精神を見事に実践されておられる皆さまが、希望の光として東北の地で輝き続けられますことを心から願っています。

参考【表 11】

桜美林大学被災地支援活動 参加人数

受入団体名	年度			2011年度参加人数			2012年度参加人数			2013年度参加人数			2014年度参加人数(7/29現在)			2011～2014計
	学生	教職員	年度計	学生	教職員	年度計	学生	教職員	年度計	学生	教職員	年度計				
1 東北教区被災者支援センター エマオ	91	3	94	40	0	40	32	0	32	8	0	8	174			
2 仙台七夕まつり(8月):大学間連携の一環	8	1	9	6	1	7	16	1	17	6	1	7	40			
3 大学間連携「気仙沼プロジェクト」	12	11	23	18	5	23	13	4	17	5	2	7	70			
4 山元町いちご農園	-	-	-	-	-	-	-	-	-	5	0	5	5			
計	111	15	126	64	6	70	61	5	66	24	3	27	289			

<参加支援概要>

- ・日本基督教団東北教区被災者支援センター「エマオ」

エマオは、仙台にあるキリスト教の団体。震災前は青年活動のサポートを行っていたが、震災後に被災者支援センターを設立。全国からボランティアを受け入れる。宗教、年齢は問わない。活動地は、宮城県仙台市荒浜地区七郷及び石巻市。

本学においては、2011年4月にキリスト教センターからチャプレン(教員)1人、サー

ビスラーニングセンター教員2人を派遣。学生受け入れの可能性を探り、受け入れ可能という判断の下、6月末から学生の参加支援を実施。2012年9月現在、休学中の学生3人もスタッフとして関わる。

・気仙沼プロジェクト

東北学院大学を中心とした大学間連携プロジェクト。宮城県気仙沼市にて活動。本学においても教職員の公募も実施し、学生及び教職員が参加。

・仙台七夕祭り

東北学院大学を中心とした大学間連携プロジェクトの一つ。仙台七夕祭りのボランティアとして、本学では2011年、2012年ともにビジネスマネジメント学群の教員とそのゼミ生が参加。

・大学科目「災害支援とボランティア」履修者

2012年度春学期より基盤教育院のフィールド教育デパートメントに科目を新設。サービス・ラーニングの要素を取り入れ、講義のほかに被災地での実習を2泊3日で実施。夏休みの活動場所は、宮城県山元町のいちご農園および仮設住宅。

出典：桜美林大学サービスラーニングセンター資料、2011～2014（7/29現在）

9、プロビデンス（摂理）

私たちの人生は、予想通りに進むものではありません。予期しない大きな幸せや成功を得ることもありますし、自分が思ったとおりに進まないこと、非常に辛い出来事に直面することもあります。東日本大震災のように、数時間前には予想もしなかったことが起こることもあるのです。しかしそれらは全て、主の計らい、つまり「プロヴィデンス」であると私は思います。

「プロヴィデンス」について、少し私自身の話をしたいと思います。キリスト教学校の創立者は学校によって宣教師であったり、日本人キリスト者であったりします。東北学院は、押川方義(まさよし)先生とウィリアム・E・ホーイ先生のお二人の協力によって創設されましたが、私が理事長を務める桜美林学園の創立者は清水安三という日本人です。当時、桜美林学園は創立者の力量で運営されていると感じていた私は、「桜美林で働く若い教職員の一人として、将来の計画やビジョンを示して頂きたい」と問いかけたことがありました。その時、創立者の清水は「聖書には明日のことを思い煩うなどある。全て、神様が道を備えていらっしゃるのだから心配する必要は無い。プロヴィデンス摂理だよ」という回答が返ってきました。私は内心、明日のパンを食べられるかどうかを思い悩むことは無いですが、大勢の学生や教職員を抱えた大学として合理的計画を持たないと困難な時代を迎えないかと心配でした。しかし、その後の人生において、私は創立者の清水から言われた「プロヴィデンス・摂理」を身に染みて感じるようになります。

私が桜美林学園で働き始めたのは25歳の時で、学生部の一職員でした。その時、私が学園の理事長になるとは思いもしませんでした。しかし、私の祖父が高等学校時代にキリスト教と出会ったこと、父母が桜美林学園の前身である崇貞学園で教員として奉仕する機会を与えられたこと、桜美林大学に学びそこに勤務することに成ったこと、そして学長、理事長、総長として学園全体の責任の一端を荷なうことに成ったこと、一つ一つが一本の目に見えない線で結ばれていたのです。また、桜美林学園がキリスト教学校教育同盟の加盟校となり、その理事長に就任したこと、そして本日皆様の前でキリスト教学校教育同盟の理事長としてお話しさせていただくことも、人々の出会いと、主の計らい、まさに「プロヴィデンス」であると感じています。

大学を取り巻く状況や、皆様自身の人生を取り巻く環境がどのように変わっていても、決してゆらぐことのない主の存在とその摂理を信じ、祈る気持ちがあれば、どんな大きな課題や困難のなかにあっても、不安に心乱されることなく歩みを進めることができるのだと思います。キリスト学校の創立、発展に尽力した先人たちがそうされたように、後に続く私達もまた、「主ならどうされるだろうか」と、常に主の教えに学びつつ、そして主が共にいてくださることを信じて、希望と勇気を、そして希望の道を見出したいと願います。今一度、皆さんが、建学の精神に立ち返り、教職員全員が祈りと思いをもって、同じ方向を目指す時、必ず、そこには希望の光が降り注ぐと思っています。今、私達がなすべきことは、これからも先人の足跡から時代を超えて語り継がれるべきものを受け継ぎつつ、それを新しい時代の文脈に沿ったものとして創造し、教育の業を展開していくことではないでしょうか。

果たして東北学院大学の皆さんが将来に向けてどの道を選ぶか。それは本当に多くの道があり、選択肢があり、可能性があると思います。私からはどの道が正しいとか、この道が良いということは全く言えませんが、皆さんが共通理解、一致した選択をなさることが一番大切だと感じています。

ところで、聖書は、神が世界を創造された天地創造の物語から始まっています。神は6日間かけて光を、空と海を、そして大地を創り、命ある者、生きる者を創造された。そして、創造された全てのものをご覧になって「これでよし」と言われた。私達は、神が祝福され「これで良い」と言われた世界に住んでいるのです。

ただ聖書はそこから全く違った歴史が綴られています。希望と喜びに満ちた物語は僅か冒頭の数ページで終わり、アダムとエバの時代以降は、神にそむき、争い、悲惨な苦難の歴史が延々と記されています。どこに希望があるのかと感ずる物語の連続です。しかし、キリスト者は、またキリスト教学校は、「神がよし」とされたことを決して忘れず心に刻み続けたいと願います。たとえ世界中が暗闇に包まれ、どこに希望が、どこに喜びがあるのかと誰もが

思う時代、社会であっても、キリスト者が希望を語らないで、キリスト教学校が希望を伝え
ないで、いったい誰が、語り、伝えることができるでしょう。

たとえどのような時代であっても、キリスト教学校こそ世の希望の光となるべく人材を育
て、送り出し続ける使命がある。私はそう思っています。

少年ダビデは、「神が共にいてくださる」と信じて、誰も近づくことさえできなかったペリ
シテ軍の大男ゴリアトに、石投げひも一つで立ち向かっていったことがサムエル記には記さ
れています。

そのサムエル記の御言葉を心に響かせながら登頂に成功したのは、人類初のエベレスト登
頂を果たしたエドモンド・ヒラリーでした。「8000mの世界で人が果たして生きられるのか」
そのことを誰もわからなかった時代に、その未知の世界に挑んだのが、内気なニュージーラ
ンド人エドモンド・ヒラリーと、最初はシェルパとして採用されたネパール人テンジン・ノ
ルゲイでした。

事実、ヒラリーは、何度も「もうこれ以上、進むのは無謀だ」と思ったそうです。それでも
彼は登り続けた。その時彼の心に響き続けたのが、先ほど紹介したダビデの言葉だったとい
います。

どのような時代、状況にあっても、私達が「神が共にいてくださる」そのことを心に響かせ
る時、必ず明日へと向かう希望と勇気が与えられると信じています。そして、「主ならどうな
さるか」と聖書の御言葉に触れる時、私達には、明日へとつながる道が示されると信じていま
す。

これからも、東北学院大学に連なる全ての皆様の上に神様の豊かな御祝福があり、貴学院
がますますご発展されますことを心よりお祈りいたします。本日はご拝聴いただき、ありが
とうございました。

全体懇談

「デフォレスト館の歴史的意義」

工学部環境建設工学科 教授 櫻井一弥 先生

「デフォレスト館の歴史的意義」

工学部環境建設工学科 教授 櫻井一弥

1. はじめに

第59回東北学院大学教職員修養会において、標記の講演を仰せつかりました。私自身は、2010年4月に本学に着任し、約5年間奉職させて頂いた、言わば新米教員ですので、私よりもはるかに長い間本学のために尽力され、また実際にデフォレスト館を使っていた教職員の皆様を前にお話しをするということで、大変緊張いたしました。

私の専門は建築設計で、これまでいなかった分野の教員ということもあり、次章に述べるようにデフォレスト館の保存復元等に関して専門的な立場からアドバイスをさせて頂いておりました。これまでも、デフォレスト館についてはその歴史的な価値などが学内で議論されてきたように伺っておりますが、建築学の見地からより詳細な調査や復元に関する事業に関わらせて戴いていることは、大変光栄なことだと感じています。

本稿では、修養会でお話いたしましたデフォレスト館の来歴や建築的な価値などについて、かいつまんでご報告させて頂きます。



写真1 デフォレスト館北側外観（筆者撮影）

2. デフォレスト館に関する調査研究の経緯

私がこの建物に関わるようになったのは、2011年3月11日の東日本大震災以後、当時の平河内健治理事長のもとで同年11月に発足した「シップル館保存・復元検討委員会(以下、検討委員会と呼ぶ)」からです。日野哲総務部長(当時)を委員長に、文学部歴史学科辻秀人先生、工学部環境建設工学科竹林芳久先生とともに、この建物の歴史的価値を明らかにしつつ、今後の復元などに関する大きな方針を模索するというのがミッションでした。検討委員会発足当時のデフォレスト館は、まだシップル館と呼ばれていましたが、震災の影響で漆喰壁が一部剥落するなどの被害が発生していました。実はこの時まで、内部に入ることはおろか、この建物の存在そのものを全く知りませんでした。お恥ずかしい限りです。

その後いろいろと調べてみましたが、以前から建築史学の分野ではこの建物は重要な遺構として位置づけられ、専門家による調査が進められていたことを知ります。それらの専門家の中には、私が前職中大変お世話になった東北大学工学部建築学科の先生方も名前を連ねられており、そうした事実を存じ上げなかったことにこれまた恥ずかしい思いをいたしました。主な既往研究は以下の通りです。

「宮城県の古建築 ー江戸・明治期の建造物ー」(1992.3)

宮城県文化財調査報告書第151集として、宮城県教育委員会が発行。
調査代表者は東北大学名誉教授の佐藤巧先生(当時東北工業大学)。

「宮城県の近代化遺産 ー宮城県近代化遺産総合調査報告書ー」(2002.3)

宮城県文化財調査報告書第190集として、宮城県教育委員会が発行。
調査代表者は東北大学教授の飯淵康一先生(当時)。

これらの調査の中で、デフォレスト館は仙台市街に残る、戦災を免れた貴重な洋館として位置づけられています。「洋館」と言っても、正確には本格的な洋風建築ではなくて、明治初期に日本の大工たちが見よう見まねで洋風建築を作ったことから、「擬洋風建築(ぎょうふうけんちく)」と呼ばれています。

検討委員会の最初の仕事は、宮城県や仙台市の文化財保護課の方々と、この建物の歴史的価値について情報交換をすることでした。その中で、文化庁の専門官が仙台を訪れる際に視察して戴く好機に恵まれ、この建物が全国的に見ても数少ない明治初期の宣教師館であること、建物の腐朽がそれほど進んでいないことなどから、きちんとした学術的な検証を踏まえて復元を行えば、文化財として残存させる価値は十分にあることが明らかになっ

てきました。

その後、竹林先生の人脈を頼って、NPO 法人歴史建築保存再生研究所による予備調査を2012年3月に実施しました。この報告でも、同時期の宣教師館と比較して、創建当初の部材がよく残っており、大変貴重な建物であることが分かりました。またこの調査の中では、デフォレスト館の今後の方向性として、主に以下の三点が提案されています。

- ・キャンパス・マスタープランの中で位置づけを明確化すべき
- ・単なる原状保存修理ではなく、活用を前提とした計画を策定すべき
- ・ひとまず国の登録有形文化財として申請すべき

私自身も、国の登録文化財への申請を考えていたところでしたので、この報告に確信を得て、日野委員長や施設部さんの協力の下で申請する運びとなります。登録文化財というのは、比較的最近できた制度で、街並みの形成に寄与する建物の外観を主に保存するという考え方で進められているものです。したがって、内部の使用についてはそれほど拘束力が強くなく、言わばゆるい保存制度ということになります。とはいえ、登録有形文化財として国の帳簿に載るのはそれほどたやすいことではなく、実際登録となったのは約一年後の2013年3月でした。

検討委員会は、その間にデフォレスト館の歴史的価値を学術的に明らかにするため、本格的な調査研究を進めようと、「東北学院大学デフォレスト館に関する建築史的調査」を東北大学大学院工学研究科助教の野村俊一氏にお願いする手はずを整えました。また、宣教師館の保存に関する先行事例として、明治学院大学白金キャンパスに残存する「インブリー館」の視察を行い、保存修復に至る経緯や、法人としての意志決定プロセス、予算、キャンパス・マスタープランの中での位置づけ、保存活用の現状などについて調査しております。

登録有形文化財として登録の後、修養会でご参加の皆様にご配布させて戴いたパンフレット「登録有形文化財デフォレスト館ハンドブック」(写真2)の作成や、シンポジウム「登録有形文化財『デフォレスト館』の魅力」の開催、それに合わせた博物館での展示など、各種の広報活動を実施したほか、前述の「東北学院大学デフォレスト館に関する建築史的調査」の成果を報告書として取りまとめ、2014年2月に発刊しました。この報告書「デフォレスト館建造物調査報告書」(写真3、以下、報告書と呼ぶ)は、文化庁をはじめとする関係各所にお送りし、高い評価を得ております。

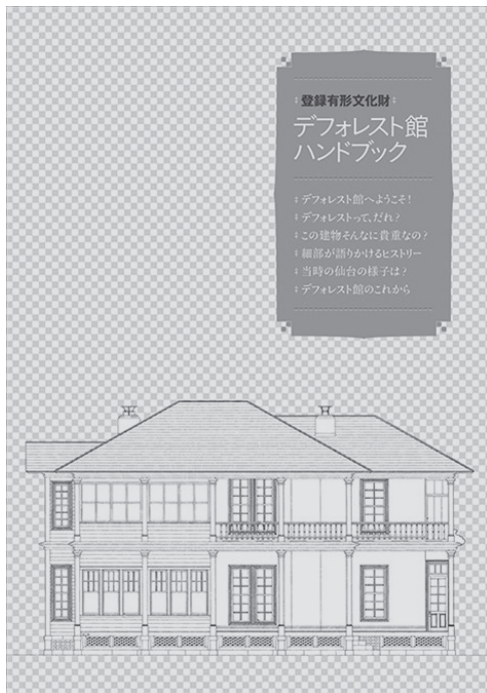


写真2 デフォレスト館ハンドブック



写真3 デフォレスト館建造物調査報告書

3. 所有と居住の履歴

長く本学にお勤めの方からすると、「デフォレスト館」よりも「シップル館」という呼称の方に馴染みがあるのではないのでしょうか。第二次世界大戦後からしばらくの間、本学に在籍されていたシップル宣教師がお住まいであったことから、そのように呼ばれていたわけですが、そもそもこの建物は、東北学院の持ち物ではありませんでした。

登記簿上最初の所有者は、「市原盛宏」です。同志社を設立した新島襄の側近で、当時同志社分校、第二の同志社として仙台に創られた「東華学校」の副校長でした。この建物は、東華学校の理事でかつ教鞭を執っていた「ジョン・ハイド・デフォレスト」のために建設された宣教師館だったのです。登記簿上の所有者歴を簡単にまとめると以下ようになります。

1887 (明治 20)年～	市原盛宏
1894 (明治 27)年～	同志社
1912 (明治 45)年～	在日本コングリゲーション宣教師社團
1917 (大正 6)年～	在日本リフォームド宣教師社團
1940 (昭和 15)年～	財団法人 東北学院

1951（昭和26）年～ 学校法人 東北学院

一方、実際にこの建物に誰が住んでいたか、ということになりますと、建物が本学もしくは本学と密接な関係のある在日本リフォームド宣教師社團の所有になる前に関しては、あまり詳しいことは分かっていません。确实なのは、ジョン・ハイド・デフォレスト夫妻が一時期住んでいた、という事実なのですが、デフォレスト氏も米国に一時帰国していたりして、その間誰かに貸していたということも否定できません。隣に建っていたブラッドショー館を含めて、同じような建物が実は三棟すぐ近くにあったことが、ごく最近の調査で分かってきたのですが、明治の激動の時代ですから、いろんな人が間借りしたり下宿したりしていたのではないかと、ということも予想されています。

上記の所有者の変遷のうち、1917年以降については、本学の記録からおおよそ以下のような居住者歴が明らかになっています。

1917（大正6）年～1930（昭和5）年ごろ

誰も住んでいなかった模様。近所から幽霊屋敷と呼ばれていたらしい。

1930（昭和5）年～1939（昭和14）年

ポール・L・ゲルハード一家が居住。

1939（昭和14）年～1945（昭和20）年

戦時中は、「萱場資郎」「宮城音五郎」などの表札が掲げられていたこともあったが実態は放置されていた模様。

1945（昭和20）年～1949（昭和24）年

進駐軍に接收される。一時アンケニー夫妻が居住。

1949（昭和24）年～1955（昭和30）年

シップル宣教師一家が居住。

1970（昭和45）年頃～1980（昭和55）年

教員研究室として使用。

1982（昭和57）年11月～1985（昭和60）年11月

大学院事務室として使用。

1985（昭和60）年12月～2011（平成23）年3月

大学教職員組合執行委員会室及び教職員休憩室として使用。

2011（平成23）年3月～現在

東日本大震災の被害により立入禁止。

この辺りの事情については、本学名誉教授である志子田光雄先生のおまとめになりました「登録有形文化財 デフォレスト館 ―仙台に現存する最古の宣教師館」（学校法人 東北学院「東北学院資料室 Vol.12」2013.4.1 発行）に詳しく述べられておりますのでご参照戴ければと思います。

上記の所有歴や居住者歴を眺めると、日本が開国し、明治初期にキリスト教教育を導入しようとしていた時期から、戦争の時代を経て、現在まで約130年に渡って、この建物が仙台という都市を見守ってきたことがよく分かります。

また、報告書の中にも記述がありますが、明治から大正にかけての仙台は、各地からカトリックやプロテスタントや正教会の宣教師が集結し、東北布教への足がかりを探っていたようで、市内各所に宣教師館が建ち並び、ミッションスクールを創設していた、言わば宗教都市のような様相を呈していたことが分かっています。

4. デフォレストとは誰か

さて、この建物の名前の由来となったデフォレストとはどんな人物なのでしょう？

デフォレストは、1844年6月、コネチカット州ウエストブルックの会衆派教会牧師ウィリアム・アルバート・ハイドの息子として生を受けました。名はジョン・キン・ハイド(John Kinne Hyde)、8人兄弟姉妹の5番目でした。1862年に南北戦争に参戦しましたが、その経験は彼が後に牧会へ身を捧げる決心に結びついていきます。1864年からイエール大学で学ぶにあたり、商人であったデフォレストが創設した基金から奨学金を得ますが、その規程に従い、以後ジョン・ハイド・デフォレスト(John Hyde DeForest)と名乗ります。

卒業後は、イエール神学校、教会牧師、二度の結婚を経て、1874年にアメリカン・ボード(米国海外伝道協会)の派遣宣教師に任職され、サンフランシスコから日本へ向かうコロラド号に乗り込みます。この船には、10年余りの滞米を終えて帰国する新島襄も乗船していました。新島とデフォレスト夫妻はアメリカン・ボードを通じて既知の間柄でした。デフォレストははじめ西日本で宣教活動を行っていましたが、1875(明治8)年に同志社を創立した新島が、キリスト教主義の学校を仙台に建てるべきと主張、日銀副総裁の富田鐵之助や仙台区長松倉恂らも巻き込んで、新島とデフォレストはアメリカン・ボードから仙台に派遣されることになったのです。

当時仙台では、ドイツ改革派教会の宣教師ウィリアム・ホーイの協力を得て、押川方義が仙台神学校(東北学院の前身)を創立していました。新島側と押川の長い折衝の末、両者の統合には至らず、押川は仙台神学校に専念するものとし、新島襄が校長となる「宮城英学

校」のちの「東華学校」が 1886（明治 19）年 9 月にスタートしました。デフォレストは理事として、また英語と聖書の教師として、自宅であるデフォレスト館から清水小路の東華学校まで通勤していました。東華学校は優秀な人材を輩出しましたが、様々な理由により僅か 5 年半後の 1892（明治 25）年に廃校となりました。

東華学校廃校後もデフォレストは仙台に留まり、日本組合教会宮城教会（現仙台北教会）の仮牧師のほか、広く説教者、講演者として東北各地で活動を行っています。1896（明治 29）年の明治三陸地震、1905（明治 38）年の飢饉の際には、積極的に救済活動を展開しました。これらの多大な功績により、1908（明治 41）年に勲四等旭日小綬賞を授与されます。1911（明治 44）年に東京の聖路加病院で 67 歳の生涯を閉じ、現在遺骨は妻、娘とともに北山墓地に眠っています。

これらのことを、関連する事項とともに簡単にまとめたものが以下の年表です。

- 1844 年 コネチカット州ウェストブルックに John Kinne Hyde として生まれる。
- 1862 年 第 28 コネチカット義勇軍に参加し、南北戦争参戦。
- 1864 年 奨学金を得てイエール大学で学ぶ。奨学金の創設者である David Curtis DeForest の規定に従い、以後 John Hyde DeForest と名乗る。
- 1868 年 イエール神学校で学ぶ。
- 1871 年 按手礼を受ける。サラ・C・コンクリンと結婚。1874 年までコネチカット州ハムデンのマウント・カーメル教会で牧会。
- 1872 年 妻と子どもを失う。
- 1874 年 サラ・エリザベス・スターと結婚。アメリカン・ボード（米国海外伝道協会）派遣宣教師として来日（同じ船に新島襄も乗っていた）。
- 1874（明治 7）年 大阪着任。西日本で宣教活動。
- 1882（明治 15）年 マラリヤ発症。休暇を得て帰米。
- 1886（明治 19）年 夫妻、子ども 4 人と仙台移住。宮城英学校誕生。同年仙台神学校開校。
- 1887（明治 20）年 宮城英学校、東華学校に名称を変更して開校。第二の同志社として、新島襄が校長、デフォレストは理事に。デフォレスト館完成。
- 1889（明治 22）年 イエール大学、デフォレストに神学博士号授与。
- 1891（明治 24）年 仙台神学校、東北学院に改名。
- 1892（明治 25）年 東華学校閉校。
- 1896（明治 29）年 明治三陸地震救援。

- 1905 (明治 38)年 東北地方飢饉救済。日露戦争中満州訪問。
- 1908 (明治 41)年 勲四等旭日小綬賞受勲。
- 1910 (明治 43)年 朝鮮組合教会支援。
- 1911 (明治 44)年 聖路加病院入院。5月8日 逝去(67歳)。

なお、本章の内容は、前掲志子田名誉教授による論文に多くを負っております。志子田先生の精力的な研究に敬意を表すとともに、この場をお借りして厚く御礼申し上げます。



写真4 デフォレスト館の書斎におけるデフォレスト
 (いずれも以下の伝記より転載 Charlotte B. DeForest, The Evolution of a Missionary: A Biography of John Hyde DeForest for Thirty-Seven Years Missionary of the American Board, in Japan. New York, Fleming H. Revell Company, 1914)

写真5 勲章を胸にしたデフォレスト

5. デフォレスト館の様式的特徴について

デフォレスト館は、どの辺がそんなに貴重なのでしょうか？

この建物の建築様式は、長崎や神戸など外国人居留地の住宅で使われはじめ、その後全国に広まった「コロニアル・スタイル」をベースとしています。コロニアル・スタイルとは、17～18世紀のイギリスやスペインなどの植民地に見られ、特に植民地時代のアメリカで発達したもので、ポーチや大きな窓、ベランダが特徴的です。デフォレスト館にも開放的なベランダやサンルーム、菱格子で装飾された天井など、その特徴を示すデザインが随所に見られます(写真6)。

ところが注意深く細かいところを見てみると、鬼瓦であったり、日本の在来工法である和小屋の構成が見られたりと、洋風の意匠の中に和の技術や意匠が取り込まれた、和様折衷的な建物となっています(写真7)。これは、2章で述べた「擬洋風」の特徴なのですが、

いくら洋風のデザインであっても、実際に施工するのが地元の大工であったため、彼らが自身の技術を適宜応用しながら造っていったことによるものです。明治期の建築事情を垣間見ることのできる貴重な遺構であると言えます。

一方でデフォレスト館の平面形式は、一般的なコロニアル・スタイルには見られない複雑かつ不規則な形状をしており、全国的にも極めて特殊なものとなっています(図1)。しかし、建築家による専門性が見られないこと、かといって、細部や屋根の納まりからみても大工や職人による構想とは考えにくいことなどから、一般的なコロニアル・スタイルを原型として、デフォレストが設計段階であれこれ注文をつけながら、変形した間取りを決定していったのではないかと推測されます。また、これまで全く不明であった設計者についてですが、今回の報告書で、設計者は当時宮城県土木課の営繕技手として在籍していた「ウエダ氏」であることが判明しました。

仙台市下に唯一現存する明治期の宣教師館であること、その平面形式が全国的に見てもかなりユニークなものであることに留まらず、当時の社会情勢や教育・文化環境、技術などが幾重にも投影された時代を映す鏡として、デフォレスト館の歴史的価値は位置づけられると考えられます。



写真6 コロニアル・スタイルの意匠(筆者撮影)



写真7 和風の意匠(筆者撮影)

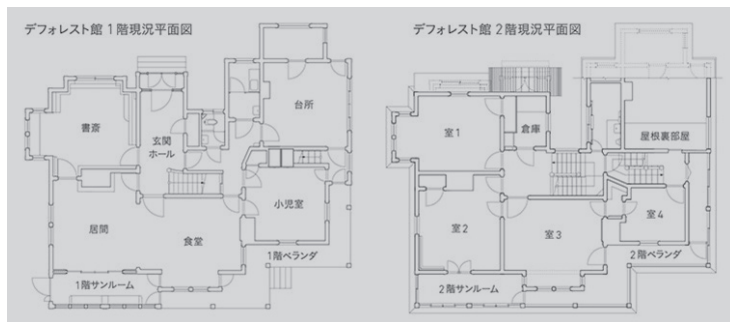


図1 デフォレスト館現況平面図

6. 今回の調査研究で明らかになったこと

報告書の中では、今回の詳細な調査研究で分かったことが記されています。

まず、創建年代についてですが、これまで「明治 20 年頃」とされてきましたが、アメリカン・ボードの報告資料などに代表される文献史料より、明治 20 年であることが特定できました。また設計者については、前章で述べた通り「ウエダ」氏であることが同じくアメリカン・ボードの資料から分かったのですが、当時宮城県に在籍した営繕技手の職員名簿を調べることにより、「植田市太郎」もしくは「植田登」であると判明しました(2014 年の追跡調査により、この両名は同一人物であることが分かっています)。

実物に即した観点からは、どこまでがオリジナルで、どこまでが改修されたものか、ということが重要なのですが、この点についても一定の成果がありました。これまで何度か大規模な改修が行われたことは、工事記録や関係者の話からも明らかですが、記録に残っていない改修などもかなり行われたようです。例えば壁と天井といった部材と部材のつなぎ目を見ると、その納まり方が不自然であったりするために、後から変更された部分であることが分かります。ベランダが内部化されてサンルームとなったり、天井が一度解体されて低い位置に張り替えられたりなど、今回そうした部分を詳細に調査することができました。

洋館のデザインを特徴づける扉の蝶番やモールディング(刳型)を細かく調べて分類したところ、創建当初から使用されていた可能性が高いもの、明らかに後からつけられたものなどが分かってきました。それらを県内の他市町村や隣県に存在する洋館のものと比較することで、蝶番に代表される金物の生産・流通の実態や、モールディングを合理的に造るための技術流通の様子などが明らかになってきました(写真 8)。

建物の印象を強く心に刻ませる「色」については、木部塗装の変遷(塗り重ね)や当初の塗膜層の残存状況を明らかにすべく、実体顕微鏡と光学顕微鏡を用いた塗膜片の観察と分析を行っています。その結果、かなりの部分で重層的に塗り重ねが行われたこと、全体の印象ががらっと変わるような全面的な塗り替えが何度か行われたことなどが分かりました(写真 9)。

3 章で述べたように、長い歴史の中で所有者や居住者が入れ替わっています。そうしたタイミングで様々な改修が行われたことは想像に難くありません。創建当初の姿のまま残っているという建物も大変貴重ではありますが、このデフォレスト館のように、その時その時の歴史を壁や天井や床に刻みつけ、表情を変えながら生き延びた建物というのも、また同様に貴重であると考えられます。

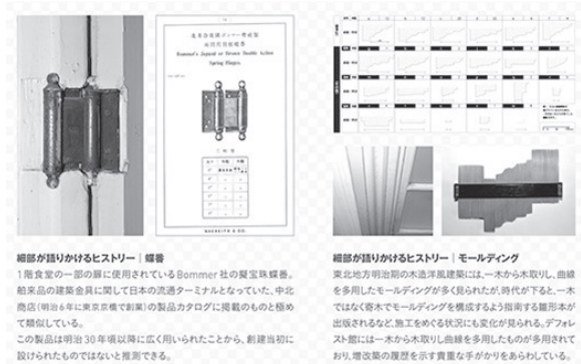


写真8 細部の履歴が分かった部分(「デフォレスト館ハンドブック」より抜粋)

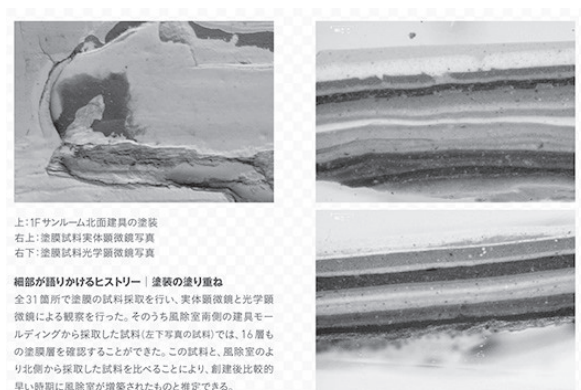


写真9 塗装の塗り重ねの分析(「デフォレスト館ハンドブック」より抜粋)

7. まとめにかえて

以上、デフォレスト館の歴史的意義について講演させて戴いた内容をご報告致しました。明治20年代の宣教師館という用途から考えると、東北地方のみならず、全国的に見ても最も古い外国人住宅に分類されることは明らかです。また、仙台を拠点として東北全域へ広がったキリスト教布教の跡をとどめる建物であること、当時の仙台における布教や教育環境の記録が刻まれた、現存するほぼ唯一の歴史的遺産であることなど、本学にとってのみならず、仙台市民にとっても保存すべき大変貴重な遺構であると考えられます。

一方、建造物としての現状を鑑みても、小屋組などの構造部材は当初のままですし、窓やドア、モールディングなど、洋風住宅で重要なパーツが残っていることも奇跡的です。壁や屋根などには大きな改修が加えられていますが、改修履歴がよく掌握できそうであるため、生活上必要な改変として、当初の状態とともに尊重されるべきであるとも考えられます。

実際の保存改修工事に至るまでには、まだまだ長い道のりが必要ですが、この貴重な遺構を次世代に引き継ぐために、教職員の皆様には、ぜひ関心を持って、あたたかく見守って戴きたいと考えております。

「弟子の足を洗う ―真の学生のための教育・研究環境の提供とは―」

院長 星宮 望

新約聖書 ヨハネによる福音書 第13章1節～17節

さて、過越祭の前のことである。イエスは、この世から父のもとへ移る御自分の時が来たことを悟り、世にいる弟子たちを愛して、この上なく愛し抜かれた。夕食のときであった。既に悪魔は、イスカリオテのシモンの子ユダに、イエスを裏切る考えを抱かせていた。イエスは、父がすべてを御自分の手にゆだねられたこと、また、御自分が神のもとから来て、神のもとに帰ろうとしていることを悟り、食事の席から立ち上がって上着を脱ぎ、手ぬぐいを取って腰にまとわれた。それから、たらいに水をくんで弟子たちの足を洗い、腰にまとった手ぬぐいでふき始められた。シモン・ペトロのところに来ると、ペトロは、「主よ、あなたがわたしの足を洗ってくださるのですか」と言った。イエスは答えて、「わたしのしていることは、今あなたには分かるまいが、後で、分かるようになる」と言われた。ペトロが、「わたしの足など、決して洗わないでください」と言うと、イエスは、「もしわたしがあなたを洗わないなら、あなたはわたしと何かかわりもないことになる」と答えられた。そこでシモン・ペトロが言った。「主よ、足だけでなく、手も頭も。」イエスは言われた。「既に体を洗った者は、全身清いのだから、足だけ洗えばよい。あなたがたは清いのだが、皆が清いわけではない。」イエスは、御自分を裏切ろうとしている者がだれであるかを知っておられた。それで、「皆が清いわけではない」と言われたのである。さて、イエスは、弟子たちの足を洗ってしまうと、上着を着て、再び席に着いて言われた。「わたしがあなたがたにしたことが分かるか。あなたがたは、わたしを『先生』とか『主』とか呼ぶ。そのように言うのは正しい。わたしはそうである。ところで、主であり、師であるわたしがあなたがたの足を洗ったのだから、あなたがたも互いに足を洗い合わなければならない。わたしがあなたがたにしたとおりに、あなたがたもするようにと、模範を示したのである。はっきり言うておく。僕は主人にまさらず、遣わされた者は遣わした者にまさりはしない。このことが分かり、そのとおりに実行するなら、幸いである。

そこで、イエスは一同を呼び寄せて言われた。「あなたがたも知っているように、異邦人の間では、支配者と見なされている人々が民を支配し、偉い人たちが権力を振っている。しかし、あなたがたの間では、そうではない。あなたがたの中で偉くなりたい者は、皆に仕える者になり、いちばん上になりたい者は、すべての人の僕になりなさい。人の子は仕えらるるためではなく仕えるために、また、多くの人の身代金として自分の命を献げるために来たのである。」

(1) はじめに（聖書のみ言葉にそって）

このヨハネによる福音書 13 章には、主イエス・キリストが弟子の足を洗ったという逸話が記されています。古代オリエント地方においては、奴隷あるいは僕(しもべ)が、主人に仕えることの象徴的な行為として主人の足を洗うのが習慣であったわけですが、それなのに、主人であり先生であるイエス・キリストが、この常識を逆転して、「弟子の足を洗った」というのです。イエスは、食事の席から立ち上がって、手ぬぐいを取って腰にまとい、たらいに水をくんで、弟子たちの足を順に洗い、そして腰にまとった手ぬぐいでふきはじめました。そして、ペテロの番になったとき、弟子であるペテロは、「主よ、あなたがわたしの足を洗ってくださいのですか」と尋ねてしまいます。それに対してイエスは「私のしていることは、今あなたには分かるまいが、後で、分かるようになる」と言われました。しかし、彼がおもわず、「私の足を洗うなどということは決してなさらないでください」と言ったことは自然であり、当然のことでした。すると、それに対して、イエスは「私があなたの足を洗わないなら、あなたは私と関わりを持たないことになる」と答えられたのでした。

主イエスキリストは、それまでの多くの場面でも常識を覆す行動をされましたが、これもその代表的なものでしょう。そして、キリストの教えの根幹をなしていると思います。もちろん、さきほど引用した「今あなたには分かるまいが、後で、分かるようになる」と言われたことは、その直後に到来する「十字架による受難、すなわち、主イエスご自身を犠牲にしての死」を予告してのことです。

そして、聖書のこの後には、「師であるわたくしがあなたがたの足を洗ったのだから、あなたがたも互いに足を洗いあわなければならない。わたしがあなたがたにしたとおりに、あなたがたもするようにと、模範を示したのである。・・・」とお教えになりました。このことは、特に「足を洗う」ということを例として、我々に「自らをささげる人生を送ることの大切さ」をお教えになったと思います。聖書の多くの箇所に記載されていますが、主イエスキリストの生涯は、自分を神にささげ、他者のためにささげる生き方を、身をもって示されました。我々

は、聖書を紐解くことによって、種々の場面や種々のたとえ話を通して、このことを学んでいきたいと思います。一例を挙げますと、さきほどお読みしましたマルコによる福音書、10章42-45節(p 83)には、「・・あなたがたの中で偉くなりたい者は、皆に仕える者になり、いちばん上になりたい者は、すべての人の僕になりなさい。人の子は仕えられるためではなく仕えるために、また、多くの人の身代金として自分の命を献げるために来たのである。」と記されています。ここでの「人の子」と表現されているのは、主イエスキリストご自身のことです。私たちのためにすべてをささげてくださいました主イエスキリストの愛に応えて、私たちも自分をささげる生き方へと導かれたいと思います。

ところで、この「弟子の足を洗うイエスキリスト」を題材にした絵(水彩画)が私の院長室に飾られています。少し説明させてください。これを描いたのは田中忠雄画伯です。田中忠雄先生は、明治36年に札幌で牧師の家庭に生まれ、画家の道を目指して活動され、フランスに渡って研鑽をつまみ、キリスト教を主題にした作品を多く制作してこられた方です。1995年に92歳の生涯を閉じられましたが、その晩年に、東北学院大学泉キャンパスの礼拝堂のステンドグラスを制作してくださいました。

泉キャンパスの礼拝堂のステンドグラスは正面には、下から上へ、十字架のイエスキリスト、復活のイエスキリスト、天に昇るイエスキリストが描かれています。この他に、左に4つ、そして右に4つあり、合計9種類のステンドグラスがあります。皆さんの中には、すでに気がついていても多いとおもわれます。これらのステンドグラスのカラー写真が東北学院大学の「礼拝説教集」の創刊号(1997年)以降、第2,3号と第7-13号の表紙を飾っています。一部、重複があったり、別の種類の絵が掲載されたことがありましたので、これまでは、これらの内の8種類のステンドグラスが紹介されています。東北学院大学「礼拝説教集」の第4号の表紙の裏に、野村 信宗教主任がこのステンドグラスについて解説をしておられます。まだ見ていない方は是非ご覧ください。この他に、これらのステンドグラスと、さきほど紹介した「弟子の足を洗うイエスキリスト」を題材にした田中忠雄先生の絵について、チャペルニュースの第97号(2006年6月)において佐々木哲夫宗教部長が解説をしておられるのでそれもお覧いただきたいと思います。

大学のことに戻って考えて見ますと、このことは、我々キリストの教えを建学の精神としている大学における教育理念の基本であるといっても良いと思います。私たち教員はこの主イエスキリストの「洗足の逸話(主人・教師が弟子の足を洗った話)」を模範とした教育を行っていきたいと念願しております。教員と学生の間でも、学生同士の間でも、心の中で「互いに相手の足を洗う」こと、すなわち、奉仕の心を持って生きていきたいと思います。

(2) 大学における教育・研究環境

ところで、今朝は、副題として掲げた「真の学生のための教育・研究環境の提供とは」ということについて考えてみたいと思います。その趣旨は、「研究・教育・学生指導のために時間を有効に使う努力を尊重し、そして学生・卒業生から授業料などで整備してきている教育・研究施設を十分に活用しよう」ということが中心になります。このことが大学における教育・研究活動をとおしての「弟子の足を洗った主イエスキリスト」に習うことになると思うからです。

今回の修養会のテーマ「聖書に聴く」、そして佐藤東洋士先生の主題講演「キリスト教学校の使命とこれからの歩み」に引き続いて考察すれば、次のような課題が重要になると思います。

①学生諸君を向いて内容豊かな教育を提供する

②そのことによって優秀な高校生が入りたい大学と評価される大学にレベルアップする。

このことは、特に、同じ法人の高等学校の生徒にとっても入学したい大学になることを意味する

③そのためには、大学教員の研究レベルアップをすることによって、高校生やそのご父母から、あの先生のところで一緒に学びたい／学ばせたいと思ってもらえること。

この3点を中心に考えて見ましょう。

ここに、文部科学省・学術振興会から獲得した「科学研究費」についての東北学院大学の実績を表すグラフがあります。平成21-25年度の実績です。この間、獲得金額がかなり増加し、私立大学の中での順位が少し上昇しているようで喜ばしいともいえますが、まだまだ不十分であると思います。最近発表された昨年度の順位は全国で199位でした。全研究機関別採択順位が241位～197位、私立大学別採択順位が81位～64位という結果は残念としかいえません。私立大学の中では上位30位までに、国立・公立大学を含めた全研究機関の中でも上位80～100位以内であってほしいと思います。外部資金の獲得は、単に資金を外部から獲得するという意味ばかりではありません。競争的な環境において、その大学における研究への取り組みが評価されているかどうか客観的にしめされることを意味していることはご承知の通りです。大学の存在意義の本質は知的活動、特に、独創性豊かな研究の展開にあります。その成果を出すためには、自由な発想で思考し、十分な吟味・実験・検証を行うための研究環境と自由な時間が必要です。それぞれの教員が研究に振り向ける自由な時間をいかに確保するかが鍵といえるでしょう。大学における時間の使い方の工夫、いかにすれば活動できる時間帯を大きく確保し、時間の無駄を極力少なくすることが肝要です。

私の研究時間についての経験を申し上げますと、大学院DC時期の研究においては、低雑音電界効果トランジスタの超微弱雑音を計測してその性質を明らかにするための実験をおこないました。この実験では、外来雑音であるラジオやTVの放送電波がなくなり、仙台市の市電の走行もない深夜、曜日によって違ったと思いますが多分午前1時から5時頃には雑音

環境が良好となりますので、DC 3年には毎日完全な徹夜実験を半年以上行いました。また、当然、お盆、新年、クリスマスもなく年間 365 日実験を行いました。このほかにも、その後、東北大学工学部助教授時代の研究生活の例としては、東北大学医学部第 1 生理学教室の西山明德教授の研究グループとの共同研究では、毎週金曜日の夜 10 時から 12 時以降までのゼミにおいて、論文抄読や研究発表を 1 年以上続けました。また、東北大学医学部第 1 解剖学教室の半田康延教授の研究グループとは、二人が助教授時代から 30 年以上にわたって、「機能的電気刺激の基礎と臨床応用」の共同研究を推進してきましたが、ここでは、まったく時間の制約をはずして、研究者が都合のつく範囲で、また、実験動物の体調を最優先して(時間は考慮しないで)、時には患者さんの都合にあわせて研究をしてきました。研究の真の推進には大学での研究時間を制約することはマチガイといえます。

(3) 東北学院大学の教育・研究環境の後進性

私が学長に就任していた 9 年間において、当初からずっと主張してきたにもかかわらず実現できなかったことについて改めてここに記し、今後の東北学院大学の教育・研究の環境整備を考えていただきたいと思います。第 1 点は、大学施設の使用時間に関する制約です。このことについては、別途、東北学院時報の平成 26 年の新年号にも記載しております。それは、国際的なレベルの研究を推進するために必要な常識ともいえることです。一例をあげますと、私は、今からおよそ 40 年前の 1975-1976 年に 14 ヶ月間スウェーデン国ウプサラ大学に長期研究出張しておりました。この大学はこの年に創立 499 年を迎えた古い歴史をもつ大学ですが、工学部系・理学部系や医学部系などの組織においては、研究者である教員はもちろん、大学院学生も大学生もそして私たち外国からの研究者もすべて、365 日/年、1 日 24 時間/日、大学への出入りは自由でした。そして、学生でも常時、大学の大型コンピュータを(学生居室やロビーにある T S S 端末などを介して)使えました。このことが重要なのです。建物の中を区分して、学生の利用できる区域と教員の利用できる区域などを鍵の種類(当時はメカニカルな鍵の形状)を変えることで上手に処理していました。簡単なことですし、今なら、電子的に容易なことです。なお、このことは、理工系に限ったことではなく、広く文系を含めた一流大学の常識とうかがっております。東北学院大学では、残念ながら 21 世紀の今でも実現していません。私が学長としてその重要性を主張してきましたが、9 年間かかっても実現できませんでした。たぶんこれまでの東北学院大学での研究に対する常識が邪魔してきたからかも知れません。キリスト者が日曜日の午前中に教会に行くことは全く関係のない制約事項です。私自身もクリスチャン家庭の 3 代目ですが、個人の信仰と公の業務としての研究との優先事項をきちんと整理しています。このような世界の一流大学の常識があることを知らないでそれらから離れたことを平気で続けてきていることは残念です。とくに、

東北学院では、法人の枢要な役職者の理解が不十分でした。教員ですら夜遅くなると警備員によって学外へ退去させられると聞いては驚くしかありませんでした。

ようやく、今年度になってからの新しい常任理事会で、平成26年9月1日から、「大学の3キャンパスの運動施設などを日曜日の午前中にも使用可とする」ことをきめました。このことは、全学の教職員宛の8月27日付けの日野 哲総務部長からのメール「東北学院大学キャンパス日曜日利用規制の緩和について」（松本宣郎学長名）にて通知されたところです。しかし、まだまだ不十分であると思います。あくまでも、「原則として、365日／年、1日24時間／日、大学への出入りは自由である（当然、一部に例外的な規制は残るとして）」ということにするべきです。言い換えれば、キャンパス開放は義務です。キャンパスの施設（校舎・グラウンドなど）は、在学生、卒業生からの授業料と公的補助金をもとに整備・使用しているものであり、いわば「公共財」（公の財産）であります。この「公共財」について、学生・卒業生・市民などへ開放するかどうかを一部の法人役員の「個人的な意見で開放しない」ということは許されません。それを建学の精神を引き継いでいるというように思い込むような錯覚は許されません。

なお、付言すれば、たまたま、昨年の秋に「医学部設置問題」が急浮上してあわてた議論があったことを記憶している方も多いと思います。基礎医学の分野の教育には、例えば、解剖実習は必須であり、常時多数のご遺体を実習のために学内に置く必要があります。そのための維持・管理は24時間体制です。また、極めて危険なウィルスや治療困難なガン組織なども学内の研究施設を常備して24時間体勢で管理しなければなりません。当然、最近話題になっているようなIPSC細胞の培養実験を夜になって中止することや、日曜日には実験しないなどと言うことが出来ないことは明白です。このことは、医学部に限らず、工学部、理学部、薬学部・・・など、世界的に一流大学の常識であります。このように考えてくるとようやく、「365日／年、24時間／日、大学へ自由に出入り可能」とすることの重要性と普遍性に少しは気がついたことでしょうか。世界中の研究者と厳しい競争をしてゆくときには、不可欠の条件です。特に、医学部付属病院は夜8時で終了して、研究者を施設から追い出すことや、日曜日の午前中だからといって入院患者を放置することや救急患者を受け付けられないなどということは社会の常識に反しており、一流の大学として存立できません。このような世界の常識に反して、一部の法人役職者が「今までどおり」と繰り返すような東北学院大学であってはならないと思います。そのことは、さきほど拝読したマルコによる福音書でかたく戒められていることであると思います。むしろ、キリスト教において、旧約聖書、新約聖書を貫いている教えは、「自分が偉い存在であると思い込んで、他者の考えを切り捨てて自分の考えを押し付けること」を厳しく戒めていると思います。

建学の精神を創立者から引きついでゆくことも大切ですが、創立者の押川正義先生らが意

図した「牧師の養成」の学校の運営には失敗して、創立5年目にして、仙台神学校を「東北学院」と名称変更して教養教育重視の一般教育を目指すことに修正したという原点に戻って考えれば、日本における「キリスト教精神を理解し、優れた教養を身につけた広い意味での人材の育成」をいかにしっかりしてゆくかを考えるべきであると思います。ぜひ、世界の一流大学の常識をふまえての「キリスト教精神を理解した人材の育成」をすすめていてもらいたいと願っております。

ここで申しあげた、キャンパスの開放(365日／年、24時間／日)は、そのこと自体が目的ではなく、この自由な時間を研究のために各人が有効に使うことによって東北学院大学がさらに素晴らしい大学に成長し、生徒・学生からみて魅力的な大学となり、同時に科学研究費ランキングでも上位へ進んでいくことを期待します。

『大学教育の「質的転換」とC O C採択の意義』

学務担当副学長 齋藤 誠

発表させていただきます。

修養会の役割は、もともと「建学の精神」を確認し、その根本であるキリスト教の理解、あるいはキリスト教信仰のスピリチュアルな部分に触れて、明日からの研究や教育活動で、その精神に基づいた活動をする、というのがその趣旨であります。こういう形で「建学の精神」について確認をするという行事を行っている大学は多くはないのです。全国的にみても、「このようなことをやっています」という話をすると、「へえそうですか」と言って、かなり珍しがられます。

しかし、これまでは、「明日から皆さん、修養会で得られたものを活かして頑張りましょう」、「それぞれの職場で頑張りましょう」ということで事は済んだのでありますけれども、最近では、それだけではその大学が同じ方向を向いて自分達の大学の活動を続けるということが難しくなっています。建学の精神を確認するとともに、今大学が置かれている状況、あるいはその中で社会から何を求められているのか、そしてそれに基づいて大学行政がどのような方向で行われているのか、ということまで含めての共通理解を得て、同じ方向を向いて活動する、ということをししないと、本当の意味で大学が同じ方向を向いているという認識を持つことができない状況にあるというのが現在であります。そこで今日は、こういうテーマで、最近の大学教育に関わる議論の様子などをご紹介します、今回本学で採択されましたC O Cの意味はどういうところにあるのかについてお話させていただきたいと思います。

いまは大学教育について、口を開けば言われていることが「質的転換」ということです。「質的転換」はということなのか。本学では「質的転換」というのはどのくらい進んでいるのか。「質的転換」とC O C、これは補助金のひとつであります、この補助金のひとつがどのように絡んでいるのか。それに本学が申請して採択をされたということはどういう意味があるのか。そして今後、本学としては、こういう流れの中で、どんなことが課題になるのか。この5つのことをお話していきたいと思います。

まず一番目です。大学教育の「質的転換」とは何かということです。「質的転換」という言葉が前面に出てきたのは、今から2年前の8月に出された中教審答申です。中教審が8月に出した答申が、そこに正式なタイトルがありますけれども、「豊かな未来を築くための大学教育

の質的転換に向けて」というタイトルです。これを省略して、この答申を「質的転換答申」というふうに一般的に呼ぶならいになっております。質的転換答申の中身については、実はこの副題の中にほぼ詰め込まれています。「生涯学び続け、主体的に考える力を育成する大学へ」というのが副題になっています。これがこの「質的転換答申」で語ろうとしていることのざっくりとした中身であります。お手元の資料には、このパワーポイントのスライドの資料の後に、資料①と、資料②ともに、この「質的転換答申」につけられている要約版であります。要するにこの答申は何をいおうとしているか、何を目指しているのかが書かれたポンチ絵ですが、見ていただくとわかりますように、ゴチャゴチャゴしていて、なかなか大変だということであります。ゆっくり見ていただくしかないのです。ただ、ここで少し背景的なものをお話ししますと、なぜ「質的転換」と仰々しい名前がけられたかということ、大学教育はがらりと変わらなければならない。だから「質的転換」と言われているわけです。なぜ、がらりと変わらなければいけないのかということ、あまり表には出てきませんが、答申のレベルでは、世の中が変わったからだ、という文脈で書かれているのです。実はこれには裏の文脈がありまして、大学は何もしてこなかった、大学は全く変わろうとしてない、という大学に対するものすごい大きな不信感があるということです。だれにあるのですかということ、中教審の委員の中の特に大学教育から少し距離を置いている人たち、つまり社会を代表している人たちです。

それから同じようなことは、現在の自民党政権の中の、例えば教育再生会議という会議ありますが、そういうところに集められている、われこそは社会の代表である、というふうに思って参加している方々に強い、ということです。大学は全くダメだ、変わってない、変わろうとしない。特に大学のどの部分がダメなのですかということ、端的に教授会なのです。教授会がダメだ、ということで、昨日、佐藤東洋士先生の講演にもありましたように、そういう文脈の中で、教授会の権限というもので拒否権を発動できるような体制をいかに清算するか、学長がリーダーシップをとって、あるいは理事会がリーダーシップをとって上からどんどんどんどんやっていかないと大学の改革は進まない、という認識が今の文部行政の背景にあるのだ、ということを理解しておかないといけないと思います。

それでこの答申によりますと、この答申だけじゃないですが、いま大学を議論する、あるいは日本の社会を議論するときに、必ずでてくるキーワードがあります。いま社会はどうなっているかという社会の変化についての理解です。まず一つ目ですが、必ずでてくるのが「予測困難な社会」になりつつあり、今後ますますそうなるという予測困難性です。もう一つは「知識基盤性」です。これからは知識基盤社会になるということです。これらについて批判的な検討はあり得ると思います。予測困難というけれど、どういう意味で予測困難なのか、本当に予測困難なのか、ある意味、予測可能なのではないか、要するに日本は沈没しかかっている、大学も沈没しかかっている。予測困難ではなく、予測可能なのではないか、という議論

もあります。しかし、社会全体としては予測困難になっているとうのです。そうすると、そういう社会の中で生きていく人たちを育てるための能力というのは、これを覚えておくとう世の中を渡れる、これを覚えておくとうまくいく、というようなものはない、ということです。あらゆる情報が古くなる、あらゆる情報が役に立たなくなる、そのつもりで教育してください、と言っているのです。そうすると、大学で学ぶことも大事だが、それ以上に、大学を終わってから生涯学び続けることが大事になる。それから、人から指図されなくても学び続けることが大切になる、というのが現在の教育改革の基本的考え方です。これは別に大学だけではなくて、中学、高等学校、小学校全部そうです。ある知識さえ学んでおけば、注入型で知識さえ学んでおけば、世の中渡れるという発想の教育からの脱却ということです。

そのために、「質的転換答申」では、二つのことを重視しています。

1つ目はとにかく勉強させるように言っています。それがいま言ったこととどのように結びついているのかと言えば、今の日本の学生には勉強の習慣がない、別に学生だけではなくて、もう高校生から勉強の習慣がなくなりつつあると。勉強の習慣がない人には、生涯学び続け、主体的に考える力が付くはずはないだろう、ということです。とりえず勉強をさせる習慣をつけましょうということです。それから、その勉強も、注入型じゃなくて、自分で考えられる、そういう姿勢を身につけましょう。これが「質的転換答申」の基本的な考え方です。

具体的にいきますと、アクティブ・ラーニングへの転換、それからプログラム型教育への転換です。アクティブ・ラーニングというのは、考え方としては一方向的な従来の講義型の授業の否定です。注入型じゃダメですよ、自分で学ぶというプロセスを入れてください、ということで、ディスカッションだとかディベートだとか、グループワークだとか、あるいはプロブレム・ベースト、あるいはプロジェクト・ベースト、いずれにしても「PBL」といわれるものや、サービス・ラーニングだとかというものを取り入れるということです。とにかく、一方向型の講義型の授業はダメだね、ということです。

2つ目は、プログラム型教育への転換です。これはあまり言われていないのですが、すごく重要視されています。何を学ぶのか、何を要請するのか、ということを引きちんとプログラムで、前もって決めておいてください、ということです。前もって決めておき、それに基づいて教育プログラムを編成してください、ということです。このプログラム型教育によって否定されるのは何かといえば、人間・個人が中心の、つまり教員が中心の教育じゃダメだ、ということです。だれだれ先生の下で学んで私はこんなにいい教育を受けました、というのは、全く否定はしませんが、基本的にはダメだということです。プログラム型では、私はこの大学で4年間学んで、この大学が身につけさせようと思ったものを身につけられてよかった、でなければならぬ。これが大学としての成功というわけです。ある先生に学んでとても勉強

になりました、いろんなことを教わりました、っていうのは昔の教育としてはよかったのかもかもしれませんが、プログラム型教育ではないということを強調しているわけです。

この答申の中心メンバーの方とお話しをしたことがありますけれども、その個人型教育の一番典型が何かというとゼミだということです。ゼミ中心の教育から脱しなければプログラム型教育はできない、とその方は言われていました。私は一部反論しました。ゼミというのはまさに属人型なのです。属人型教育の象徴だということなのです。

それでは、本学ではこの質的転換は進んでいるのですか、ということが次の問題です。いまはこういう答申がでると、すぐさま文科省はそれについてその方針がどのくらい実施されているか、という観点から補助金をつけるというのが当たり前になっています。例えば、その中の代表的なものが、昨年からはまりました「私立大学等改革総合支援事業」です。私立大学を改革するための総合支援事業、その中で、タイプ1、タイプ2、タイプ3、タイプ4とありますが、ここでは細かい話はやめておきます。その中の最初の、タイプ1ですが、大学教育の質的転換型、つまりそれぞれの大学が、いま言ったような意味での大学教育の質的転換をどのくらい行っているかをチェックリストによって点数化し、その点数に基づいて一定のレベル以上の大学に補助金をつける、というやり方です。それで去年私たちの大学は、100点満点でチェックリストで点数を採点しましたところ、25点でした。25点です。去年出した大学の中の最底辺校です。最低辺校、最も点数が低いグループです。これではいくらなんでもまずいです。大学でなんとか単位をもらえるのは60点だから、今年はいくつか、60点を目標にがんばろう、ということでいろんなことをやってきましたけども、昨日の夜の段階の集計では46点です。今年の点数は46点ということで、これではもう到底、合格ラインには達しないということです。

では、具体的にチェックリストはどういうものかということ、お手元に資料③という形でチェックリストを挙げています。その文部行政あるいは中教審答申とこういったものがいかに連動しているかという一つの例をお話しします。この答申がでて数か月後に、あるシンポジウムがありまして、その文科省の私大の責任者、役人の方は「この答申については全学に知らしめてください。必ず教職員全員がこの答申を読むような機会を設けてください。」と言われました。そのときは、「そうか、そうしなければ」と思いましたけど、そうしたら、このチェックリストの⑤を見てください。教育の質的転換に関するFDの実施、つまり、おそらく大学は先生方にはすぐそういう情報を流すことをFDという形では実施するでしょうが、しかし職員にはなかなか浸透させられないのではないかということで、「SDを実施しているか」というのがチェックポイントに入るわけです。そこで、何点ついているのかということ、3点という点数がつきます。というように、いまはとにかく、文科省の動向をみながら、それにいち早く対応をするということをしないと、少なくとも補助金との関係では対応できな

いのです。お断りしておきますけども、じゃあこれ全部やったら受験生集まるのかといえば、それはまた別問題です。受験生が集まるかどうかというのは別の問題ですが、少なくとも補助金獲得との関係では困ったことになる、ということです。

つぎの、今年は46点ですけど、もっと点数を高くするためにはどうすればいいのか、ということ。どこが足りないのか。配分が大きいところを4つ挙げておきました。まず、「学生の学習時間の実態や学習行動の把握の組織的な実態」。これは10点満点ですけども、本学はほとんど点数がありません。それからもうひとつ、「学生による授業評価結果の活用」、これも10点満点ですけども、うちはほとんど点数がありません。また、「アクティブ・ラーニングによる授業の実施」は5点ですけども、これもほとんど点数がありません。部分的には実行していると思いますが、非常に細かい要件がありまして、その要件に合致しないと点数がつかない、つまりそう簡単には点数がつかないしくみになっているということです。それから「学生の学習成果の把握」、これが5点です。この4つを完璧に実行すると30点です。で、さっきの46点に30点をたすと76点です。これは成績でいうと、十分に単位をもらえて余りある点数になるわけです。

それで、これとの関係で一つだけお話しさせていただきますと、特に事務職員の方にお聞きしたいのですが、例えば、ここの⑩「学生による授業評価結果の活用」です。じつは本学ではこれは一部実行しているのです。しくみもあるし、一部学部では行っています。にもかかわらず文科省に申請するときには、ほとんど0点という形で申請せざるを得ない。なぜかといえば、エビデンス(証拠)がないからです。エビデンスとはなにかというと、書類です。証拠書類です。証拠書類さえあれば、点数がつくのに、実態としては行っているのですが証拠書類がないために点数にならないというのが、何点かあります。もっとも、それを足したからといって60点にはなりませんから、焼け石に水っていえば焼け石に水ですけど…。しかし、各事務職、特に学務系の事務職の方にとっては、このチェックリストを意識しながら、どういうふうになればこの点数がとれるか、どういう書類を残しておけばその点数のエビデンスになるか、という意識を持って日々の業務にあたっていただければというふうに思います。

次であります。そういう質的転換と今回のCOCの関係です。COCは、もう皆さんご存知だと思いますけれども、「地(知)の拠点整備事業」といわれているもので、これも去年から実施されたものであります。COCというのは、まさに「質的転換」を促進するためのプログラムだ、補助金だ、というふうに考えることができます。

まず、目的がいくつかありますが、地域のための大学という目標設定を持ってそのために教育プログラムを整備するよにということで、これはまさにプログラム型教育の推進です。あなた方の大学は、どんな人材を育てようと思っているのかということをもまず決めて、それ

に対応する教育プログラムをしっかりと整備してください、ということでもあります。

2つ目。地域の課題の認識とその解決に向けた学習の推進ということで、徹底してアクティブ・ラーニング、あるいはPBLとかサービス・ラーニングとか、そういったものを取り入れなければならない、これが採択の要件になっています。学生の主体的な学習によってやらなければならない、ということが要件となっています。それでその結果として、課題解決に向けて、主体的に行動できる人材の養成、というのが目標になっていて、まさにこれが中教審答申です。質的転換を促進するための補助金、ということでもあります。

本学はこのCOCに申請して採択されました。どんなふうにして採択されたのかについては、お手元の最後のページに、資料④という形でポンチ絵がありますので、後でご覧ください。ポイントだけ挙げておきます。本学は、「地域志向」の教育体制、教育プログラムを整備しました。カリキュラムの中にしっかりと地域志向教育っていうやつを入れました。それから、地域課題と教育・研究の連結、ということをはっきりと打ち出しました。さらに教育方法としても、アクティブ・ラーニング、PBLを入れています。

本学は、COCへの申請を通じて、まず「地域志向」の大学教育を決断したことになります。地域志向を決断すれば、例えばグローバル対応は決断できないのかと言えば、両方可可能です。しかし、いまのところ本学は、スーパーグローバルという補助金があるのですが、スーパーグローバルに対応できるかと言えば、できません。いまの本学の力、というか実態からするとそうなります。そうするとやっぱり今文科省が準備している中では、そのCOCというのがうちの現実に合っているということです。大学としては、地域志向の人材を養成するという戦略的態度決定した、ということです。2つ目、それに基づいてプログラム、教育プログラムを開発したということです。1、2年生から3年生と、その地域教育科目というのを置いて、そしてそれに基づいて地域教育、地域志向教育を行うということです。

それから3つ目として、PBL、地域との連携、能動的学習方法というのを、主体的、組織的に導入しました。しかし、皮肉なことですが、本学全体としては、例えばPBL、PBLとかアクティブ・ラーニングということについて、まだまだ力が弱いわけです。だから、実際のところ、このプログラムを動かしていくときには外部の人たちに頼らざるを得ない。外部の団体で、そういうアクティブ・ラーニング、PBLの学習についてかなり研究しているところがあり、本学に協力する用意がありますよという、そういう外部団体があったので、今回のプロジェクトに乗っていただいた、その人たちの協力がなかったらできなかった、ということでもあります。

最後に、本学としては今後どのようなことが課題になるのか、ということです。端的に先に挙げました4つを満たせば、あと30点とれます。

1つ目、学習行動、学習時間の組織的な把握のためのなんらかのしくみです。私が今のと

ころ考えて一部提案していますが、「学習ポート・フォリオ」というものを全学的に導入しようというものです。「学習ポート・フォリオ」というのは、学生個人が自分の学習行動とか学習履歴をきちんとメモしておく。そういうしくみであります。

2つ目、学習成果の組織的把握。これについては「ルーブリック」という手法を入れるつもりです。「ルーブリック」というのは、これができるか、これができるか、これができるか、というかなり具体的な学習成果について、全学的に教員がチェックしていく、あるいは学生本人がチェックしていく、そういうしくみであります。そうすると、「ああ君は、これはできるけど、これはできないね」ということを全学的に明快に理解することができる、いうことであります。

3つ目はアクティブ・ラーニングの実施、地域と結びついたPBL、それがサービス・ラーニングの拡大ですが、別にこれは、その単に今回のそのCOC絡みだけではなくて、普通の授業でもすべての先生がいかに今までの講義型授業を転換して、いくらかでもそのアクティブ・ラーニング的な要素を入れるか、ということ工夫し、お互いのノウハウを共有しあう、ということが重要になってくると思います。

4つ目、授業評価結果を活用するための組織づくり、ということです。これについても今までは各学部にお任せしてきましたけれども、今私が考えているのは、もう授業評価を全学的に実施します。そしてその結果も全学的に集計します。その結果、各学部に対して全学的な組織があなたの学部のこの授業については、少し問題がありそうですのでなんとかしてください、ということ各学部長に指示して、そしてそれについて回答書をもらう、というそういうしくみをつくることによって、学部単位ではなく、全学的にこの授業評価を授業改善に結びつけるような、そういう取り組みが必要だろうというふうに思っております。これが、ここ一年ぐらいの間にできますと、少なくとも30点が付いて、先程の点数からいうとかなりお高いものになる。

しかし、確認しますが、別に点数をとって補助金をもらうために大学改革をしているわけではありません。皆さんラーニング・ピラミッドについてはご存知だと思いますが、一方向的に人の話をただ聴いているだけだと、半年経つと言われたことの一割も定着しないのです。つまりいくらしゃべってもほとんど無駄だということです。それを、せめて卒業するまで覚えている量を増やすためには、やっぱり、一方向型の授業ではなく、授業の仕方を工夫しないといけません。これは別に補助金をもらうためではなくて、まさに教育効果とか、あるいはその教育の質を高めるための取り組みなのです。

ということで、こういう流れの中にいま大学教育の改革が置かれているという、そういう共通の認識を持って、共通の思いを持って動いていただくということが大切であるということをお話し、私のまとめとさせていただきます。ご清聴どうもありがとうございました。

2014 年度

第 19 回 キリスト者教員研修会報告

第 19 回キリスト者教員研修会プログラム

日時：2015 年 1 月 22 日（木）

15:00～19:30

場所：仙台国際ホテル

総合司会 大学宗教主任 原田浩司

時間・会場	内 容
15:00～15:30	開会礼拝 司会・説教 大学宗教主任 野村 信 讃美歌 348 番 聖 書 出エジプト記 16 章 1～8 節 説 教 祈 禱 讃美歌 543 番
15:30～15:45	コーヒー・ブレイク
15:45～16:45	主題「新年度の宗教部の歩みについて」 講師 大学宗教主任 野村 信
16:45～18:00	自由討議 司会 大学宗教主任 出村みや子 発題をめぐって
18:00～19:30	クリスチャン・フェローシップ 司会 大学宗教主任 北 博 閉会

【開会礼拝説教】

「あるものを存分に使う」

大学宗教主任 野村 信

出エジプト記第16章 1節～8節

イスラエルの人々の共同体全体はエリムを出発し、エリムとシナイとの間にあるシンの荒れ野に向かった。それはエジプトの国を出た年の第二の月の十五日であった。荒れ野に入ると、イスラエルの人々の共同体全体はモーセとアロンに向かって不平を述べ立てた。イスラエルの人々は彼らに言った。「我々はエジプトの国で、主の手にかかって、死んだ方がましだった。あのときは肉のたくさん入った鍋の前に座り、パンを腹いっぱい食べられたのに。あなたたちは我々をこの荒れ野に連れ出し、この全会衆を飢え死にさせようとしている。」

主はモーセに言われた。「見よ、わたしはあなたたちのために、天からパンを降らせる。民は出て行って、毎日必要な分だけ集める。わたしは、彼らがわたしの指示どおりにするかどうかを試す。ただし、六日目に家に持ち帰ったものを整えれば、毎日集める分の二倍になっている。」

モーセとアロンはすべてのイスラエルの人々に向かって言った。「夕暮れに、あなたたちは、主があなたたちをエジプトの国から導き出されたことを知り、朝に、主の栄光を見る。あなたたちが主に向かって不平を述べるのを主が聞かれたからだ。我々が何者なので、我々に向かって不平を述べるのか。」

モーセは更に言った。「主は夕暮れに、あなたたちに肉を与えて食べさせ、朝にパンを与えて満腹にさせられる。主は、あなたたちが主に向かって述べた不平を、聞かれたからだ。一体、我々は何者なのか。あなたたちは我々に向かってではなく、実は、主に向かって不平を述べているのだ。」

ヴィクトール・エミール・フランクル(Viktor Emil Frankl、1905年-1997年)は、オーストリアの精神科医、心理学者でした。ドイツのナチスヒットラーのもので、ユダヤ人迫害によって、強制収容所で生活させられました。戦後、著作を多数発表し、特に『夜と霧』で世界中に知られるようになりました。一連の著作で、フランクルは、精神科医として、窮地におかれた人がいかに困難を乗り越えるかを語りましたが、その教えは、一般に、ロゴセラピー

と呼ばれています。それは、簡単に言えば、「生きる意味を問うことで、心の病をいやし、新しく出発すること」です。つまり、人生をどのように生きるかではなく、与えられた人生の中でいかに生きれるか、という視点に立つことが大切だというわけです。

私たちの人生の歩みの中で、しばしば、あれがない、これが足りない、これがダメだとつぶやき、この問題さえ解決できたらうまく行くと思いがちですが、逆に、あれがないままに、これが足りないまま、これが欠けている、という問題の多い状態の中で、何が出来るのか、その制限内で、どれだけ十分に、楽しく生きられるか、充実できるか、やっつてごらんと、人生が我々に問うている、と考えるわけです。

その一例が、フランクルの収容所の中での取り組みでした。強制収容所という過酷で、極限状態におかれ、働けなくなればガス室に送られるという命がけの日々を過ごしていました。フランクルは、無理にでも働けるように元気そうに振舞わなければなりません。地面には陶器の破片くらいは落ちていますから、それを拾って、ひげをそります。当然、血が出てきますが、その血で顔を拭いて、赤ら顔にし、血色の良い顔色に見せるという努力もしました。多くの仲間が失われていく中で、フランクルは最後まで、あきらめず、精一杯努力して生き抜いたのです。

ないものや、不自由や、欠点に対して不平を言っても、何も解決しない、ということは少なくありません。いや、むしろ、今あるものを存分に使って私たちは生きているでしょうか。しばしば、自分が持っているものは、当然のように思い、まるで納屋にでもしまうかのようになり、使わずに大事にとっておくということがあります。そこで、今あるものをもっと有効に使い、存分に使って充実と良い成果を上げる、ということが何よりも第一に欠かせないことです。

同じことを言っている人に、乙武 洋匡(おとたけ ひろただ、1976年～)さんという方がおられます。日本の作家、タレント、東京都教育委員、NPO 法人グリーンバード新宿代表、元教職員、元スポーツライターと、いろいろな肩書をもっている人で、テレビにも良く出てくる方です。この人の書いた『五体不満足』はベストセラーになりましたが、最近出版された本に『自分を愛する力』という題の本があり、教えられるところが多い本です。その中で、次のような主旨のことが言われています。

障害のあることは不自由であっても、決して不幸ではない。

無いものを嘆いていても何も実りはない、

あるものを存分に使おう。

画家で詩人の星野富広さんも、全身は不自由ですが、口に絵筆やペンを咥えて絵を描き、詩作を続けている方です。その働きとメッセージは、多くの人々に勇気と力を与えています。毎年のカレンダーや画集は本屋の店頭に置かれています。

先ほどお読みしました聖書には、イスラエルの人々がエジプトから脱出して故郷カナンに帰郷していく、いわゆる出エジプトの記録が記されています。40年の長きに亘る彼らの道中において、彼らが毎日得たものは、朝にマナ、夕にうずらという食物でした。出発してすぐに、わずかな食糧に対して民らは不平と怒りを発しましたが、しかし、確かに彼らはその食糧で養われ、無事に故郷に帰還できたのです。あるものを感謝して受け止め、置かれたところで精一杯に、それぞれの勤めに励むということは、神の求めるところです。なるほど、道中には、希望らしきものも、輝かしいものもなく、ただ砂漠の広がる世界を彼らは、旅していました。その向こうには約束された王国が待っていましたが、眼前に広がる世界は砂漠でした。指導者モーセは、年老いて故郷を眼下に見つめながら、生涯を終えたのです。しかし、民を故郷へ連れ帰るという大役は、果たし終えた満足と感謝にあふれたことでしょうか。後は次の世代が継承してくれるのです。大切なことは、人生に対する眼差しであり、何よりも私たちの創造主、導き手、救済者なる神への信仰と信頼です。私たちは人間以上にはなれないのです。この時代以外、この環境以外で生きることはできません。

私たちの大学も、宗教の活動においても、確かに、無いもの尽くしになってきた感があります。しかし、あるものを十分使っているかという点、その点、もっと工夫や努力すべきことはたくさんありそうです。そこで、今あるものを大切に、あるものをもっと有効に使うべきでしょう。よりよく活用して、進んでいく、これが新年度に向けて取り組むべき大切な点です。

【発題】

「新年度の歩みについて」

大学宗教研主任 野村 信

- ＜三原則＞
- 1、「学生のために」を目指す。
 - 2、「変えるべきこと」は変え、「変えてはいけない」ことは変えない。
 - 3、「明確な軸」と「豊かな広がり」をもつ。

【1】三原則の解説

1 「学生のために」を目指す。

学生たちが聖書の教えによって豊かに成長し、満足できる4年間を過ごした、という実感を抱けるように努力したいと思います。本学の学生を対象とした「学生の意識調査」によると、数値的には芳しいものではないというデータが出ています。大学礼拝とキリスト教学、さらに多様なキャンパス・ミニストリーが、「学生たちの資質の向上」に役立つように、細やかに気を配り、彼らの声に耳を傾けていくことが大切です。本学の建学の精神とその内容であるキリスト教教育が充実したものであることが、結局大学の評判を上げ、受験生の獲得、OB、OGたちからの母校への感謝と支援を得る近道です。卒業時の意識調査の評価が低いのは、改善の余地が大いにあることを示しています。

2 「変えるべきこと」は変え、「変えてはいけない」ことは変えない。

「変えるべきこと」と「変えてはいけない」ことは、車の両輪であり、一方だけが主張されても車は道をまっすぐに前進できません。両者の同時進行的な取り組みが不可欠です。そこで、効果の出るように「変える」ためには、まず「変えてはいけない」ことをしっかりと確認しておきましょう。それは、「毎日の大学礼拝」の充実です。特に、最初が肝心で、入学式、オリエンテーションの礼拝を良く準備し、心をこめて学生たちに礼拝の大切さを伝える取り組みが大切です。学生たちが大切な一時であると最初に自覚できることで好スタートを切れます。さらに「キリスト教学」と諸行事です。これらは別の機会に論じることになります。このような三つの軸を充実させ、不動の柱とすることで、次に、多変えるべきことを論じることができます。それは、特に、出版物の新鮮さや催し物などの変化、工夫があって良いと思

ます(詳細は後述)。

3 「明確な軸」と「豊かな広がり」をもつ。

本学の建学の精神とその内容は、「聖書に基づいたキリスト教教育」ですが、その精神を随所に豊かに広げる努力が必要です。神学的に言えば、20世紀は一点集中主義でしたが、21世紀は、一点から全体へ実り豊かに広げるような方向が望ましい。一点集中は、緩んだ世界には効果的ですが、豊かな継続を求める世界には、多様化、共生の視点が欠かせません。さもないと、すでに日本だけでなく、世界的な傾向となっていますが、プロテスタントの減少、衰退が著しい。平和な時代の一点集中は、overdefensive(過剰防衛)になり過ぎ、ゲッター化する危険性があります。

以上、新年度の歩みについては、この三原則を心に留め、宗教活動に取り組みたいと考えています。

【2】具体的方針：「あるもの」をもっと有効に使い、「衰えたもの」を活性化する。

そこで、具体的にどのように取り組むかを考えましょう。先の開会礼拝でも語りましたように、「あるもの」をもっと有効に使い、「衰えたもの」を活性化する姿勢を基本に据えます。概略は以下のようになります。

- 「在(あ)るもの」… (1) **大学礼拝** 礼拝の充実(大学礼拝の神学的な基盤を確立すべきです。礼拝の形式や説教は、もう少し弾力性のある多様性がある方が良い。
- (2) **聖書研究会** キ等学生は属することを前提とすべし。多様多様な性格。主催する先生方の多用な取り組みと継続性を奨励したい。
- (3) **諸行事**(2 colleges、昼食会) 二つのカレッジの内容の充実を目指しましょう。夏は学生に広範に呼び掛けること。
- (4) **教職員修養会** プログラムを見直し、内容の充実を図る。特に、二日間をもっと有効に使うために、夜の部も何かもうける。
- (5) **印刷物** チャペルニュースを年に3回発行。新しい記事を入れ、興味を惹くように務める。ガイド、説教集も同様に取り組む。
- (6) **礼拝堂**(Chapel hour, Lunch Time Concert…)「学生のために」開放。もう少し、入りやすいイベントや、時間を設定したい。
- (7) **小礼拝堂、資料室** 「学生のために」使用可(青学の学生部屋)キリスト教資料室を有効に活用したい。小礼拝堂も何か考えたい。

- (8) **その他**(キリスト教学…)「学生のために」になっているか授業参観。
キリスト教学担当教員の講義の工夫やアドバイスの交換など。
- 「衰えたもの」… (1) **聖歌隊** 新年度は0から出発となりますので、私が旗振りをします。
- (2) **キリスト者等推薦学生(の会)** … (ネーミング必要か、部屋も必要)
- (3) **教職員への礼拝、聖書研究会**を開くことが期待される。
- (4) **総合人文学科**のもつキリスト教性をもう少し前に押し出すべきです。

2、将来の課題

- (1) 「キリスト教音楽」
- i) 器学(オルガン)は、非常に盛んである。しかし、
 - ii) 声学(合唱)は、学生の指導者も不在で、甚だしく弱い。
- (2) 「キリスト教美術」 … 視覚的に弱く、まだ不備である。
- (3) 「キリスト教文学」 資料室を活用したい。
- (4) 「キリスト教活動」 学内での何らかの交流。
- (5) その他、宗教センターの将来の設置や学生たちの集まれる場所の確保。

以上、時間のかかることも多いですが、少しずつ進めていきたいと考えています。(終わり)

2014 年度
第 40 回 サマーカレッジ

2014年度 サマー・カレッジプログラム

主題：「異文化交流とキリスト教の歴史－支倉常長の旅」

場所：宮城蔵王ロイヤルホテル

時	4日(月)	5日(火)	6日(水)
		7-9 朝食 (バイキング)	7-9 朝食 (バイキング)
9:00		9:00 朝の祈り (担当 土田悠太) 9:30 <ちよっと チャット>	9:00 朝の祈り (担当 三浦智宏) 9:30 <ちよっと チャット>
10:00		10:00 「支倉常長の旅について学ぶ」 (「慶長遣欧使節」に関する映像資料と解説) 講師 出村 みや子先生	10:00 グループ討論 10:45 グループ討論の報告 アンケートの記入
11:00		11:30 グループ討論	11:30 閉会礼拝 (担当 長井太) 12:00 昼食 12:40 出発
12:00		12:30 昼食	
1:00		1:30 出発 バスで蔵王のお釜見学と散策	1:40 仙台市博物館見学 展示「慶長遣欧使節」の説明 学芸員による講演
2:00	2:30 集合 (土樋キャンパス正門) バスでホテルに移動 3:30 開会礼拝 (担当 菊地凌也) オリエンテーション 事務局	3:30 リクレーション (担当2人) (長谷部雄太 菊地凌也) (長井太 佐藤拓弥) フットサル ビーチバレー DVDなど 入浴・休憩	3:30 解散
3:00			
4:00	自由時間 (各部屋での親睦会と 全体の親睦会)		
5:00			
6:00	夕食 (座席は番号札で) (担当1、伊藤彩花) (担当2、幕田菜月)	夕食 (座席は番号札で) (担当1、庄司彩香) (担当2、吉田桃子)	
7:00	7:30 異文化交流についての話し合い (担当3、4年生)	7:30 証と讃美の時 (学生4名と職員) (佐藤拓弥) (森 将徳) (市川文章) (塩田有香理) 担当 原田先生 野村先生	
8:00	8:15 交わりとリクレーション 担当 佐藤美月 鈴木翔子 山田保 小野世椰		
9:00	9:00 夕べの祈り (佐々木哲夫先生) 9:30 解散	9:00 夕べの祈り (北 博先生) 9:30 解散	
10:00	就寝	就寝	

「異文化交流とキリスト教の歴史 — 支倉常長の旅」

宗教主任 出村みや子

昨年の8月4～6日の日程で開催されたサマー・カレッジ(於蔵王ロイヤルホテル)では、「異文化交流とキリスト教の歴史——支倉常長の旅」を主題とした企画及び講演を行ったので、ここにご報告したい。一昨年の2013年は、伊達政宗が慶長遣欧使節をメキシコおよびヨーロッパに派遣してからちょうど400年を迎え、遣欧使節に関する出版、報道、講演会や展覧会が開催された。さらに同年秋には、「慶長遣欧使節出帆400年・ユネスコ世界記憶遺産記念登録」を記念した特別展「伊達政宗の夢 慶長遣欧使節と南蛮文化」が仙台市博物館で開催されたことも記憶に新しい。そこで2日目の8月5日に事前学習を兼ねた講演Ⅰを担当すると共に、最終日の午後には参加者一同で仙台市博物館を訪問して学芸員の講演Ⅱを聞き、博物館に展示されている関係資料を見るプログラムを企画した。

慶長遣欧使節とは、スペイン領メキシコとの交易と仙台藩内の布教のための宣教師の派遣を求める伊達政宗の命を受け、支倉常長をはじめとする仙台藩士と従者たち、それに大使で先導役のフランシスコ会宣教師ソテロとスペイン返礼大使のビスカイノら南蛮人を含む総勢約180名の使節団が、慶長18年9月15日(1613年10月8日)に「サン・ファン・パウティスタ号」で男鹿半島月浦(現・石巻市)を出帆し、スペイン領メキシコを経て本国スペインへ、さらには教皇との謁見のためにローマまでの旅をし、帰国までに7年もの歳月を要した仙台藩の外交使節のことである。その間に常長一行は行く先々で歓迎され、フェリペ三世らスペイン王侯貴族が列席する中で洗礼を受けるが、日本国内におけるキリスト教禁令政策の進展のために、交易を許可するフェリペ三世の書状を受け取ることはできず、フィリピン経由で失意の帰国をする。

私が担当した講演Ⅰでは、「慶長遣欧使節」に関する映像資料を参照しながら、使節派遣の経緯や、当時のキリスト教と海外交易をめぐる国内の状況について解説を行った。東日本大震災後には、ちょうど400年前に起きた慶長大地震と津波に関する過去の資料が見直され、石巻サン・ファン館館長の濱田直嗣氏が、政宗の使節派遣には仙台藩沿岸部における震災からの復興という面もあったとの説を提起されたので、この説を紹介すると共に、既に鎖国状態となっていた日本に帰国後も常長がその信仰にとどまったかどうかについての最近の研究にも言及した。

3日目の午後には参加者一同で仙台市博物館を訪問し、「伊達政宗と慶長遣欧使節」の講演を聞き、支倉使節に関する展示を見学した。今回講演Ⅱを担当された学芸員の佐々木徹氏は東北学院の歴史学科の卒業生であり、昨年の特別展の準備のためにスペインやローマを訪れておられ、その際に撮影した映像資料も合わせて見せていただくことができた。

講演は慶長遣欧使節についての解説の他、今回ユネスコ世界記憶遺産に登録された「支倉常長像」、「ローマ教皇パウロ五世像」、「ローマ市公民権証書」の三点を中心に、政宗の書状や使節関係者の書簡、スペインのシマンカス文書館やプラド美術館、ヴァチカン・アポストリカ図書館などに収蔵された品々、支倉家が所蔵していたキリシタン関係の資料などについて興味深い説明がなされた。外交交渉の成果は得られなかったものの、ヨーロッパに目をむけて東西交流の先駆けとなったサムライたちが仙台の地にいたことを知ることは、現在の私たちが取り組んでいる震災からの復興にとっても大きな励ましとなる。そのような意味で昨年のサマー・カレッジは、参加学生および教職員にとって非常に示唆的なプログラムであったと思われる。

参考資料

- ・五野井隆史著『人物叢書 支倉常長』吉川弘文館、2003年
- ・『伊達政宗の夢 慶長遣欧使節と南蛮文化』（特別展 慶長遣欧使節出帆400年・ユネスコ世界記憶遺産登録記念図録）仙台市博物館、2013年
[なおこの図録の162頁以下に「伊達政宗と慶長遣欧使節—大洋の向こうに見た夢」と題する佐々木徹氏の論文が収録されている]
- ・河北新聞社[編]『潮路はるかに 慶長遣欧使節船出帆400年』竹書房、2014年

2014 年度（平成 26）年度

東北学院大学宗教活動報告

2013（平成25）年度東北学院大学宗教活動報告

◇教員組織

宗教部長	佐々木哲夫
書記	野村 信
土樋 担当	原口尚彰、出村みや子
泉 担当	野村信、村上みか
多賀城担当	原田浩司
大学オルガニスト	今井奈緒子
キリスト教文化研究所所長	出村みや子
総合人文学科長	北 博

◇大学礼拝

月～土曜日	10時25分～10時45分（土樋朝、泉、多賀城）
水曜日	19時35分～19時55分（土樋夜）
月曜日	19時30分～20時（泉女子寄宿舍）
火曜日	19時30分～20時（泉男子寄宿舍、旭ヶ岡寄宿舍）

年間総出席者数

	2014年度			2013年度			2012年度		
	総数	回数	平均	総数	回数	平均	総数	回数	平均
土樋・朝	17,033	180	95	13,162	181	73	26,593	181	147
泉	67,264	180	374	53,489	181	296	61,049	181	337
多賀城	39,514	178	222	31,548	181	174	40,629	181	224
土樋・夜	1,147	33	35	1,321	34	39	1,528	31	49
総計	124,958	571	218	99,520	577	172	129,799	574	226

〔備考〕・春季・秋季特別伝道礼拝、大学クリスマス礼拝を含む。

・平均値の小数点は四捨五入。

大学礼拝

総回数	654回〔3キャンパス（571回）・寄宿舍（83回）〕
外部（牧師）	287回
学内	382回

—学内内訳—	
院長、学長、キリスト者教員など	77回
宗教部関係者	305回
—宗教部関係者内訳—	
宗教部長	33回
野村信大学宗教主任	34回
佐藤司郎大学宗教主任	25回
原口尚彰大学宗教主任	29回
出村みや子大学宗教主任	30回
村上みか大学宗教主任	29回
原田浩司大学宗教主任	29回
北博総合人文学科長	29回
佐々木勝彦先生（総合人文学科）	29回
マーチーデイビッド先生（総合人文学科）	29回
今井奈緒子大学オルガニスト	5回
讚美礼拝合唱団	4回

◇春季宗教教育強調週間特別伝道礼拝

日 時	2014年5月13日（火）10時10分～11時00分	泉（参加者1,279名）
	2014年5月14日（水）10時10分～11時00分	土樋（参加者448名）
説教者	藤掛順一牧師（日本基督教団横浜指路教会）	
説教題	「誰に雇われるか」	
聖書箇所	マタイによる福音書 第20章1～16節	
日時・場所	2014年5月14日（水）10時10分～11時00分	多賀城（参加者832名）
	19時35分～20時25分	土樋夜（参加者57名）
説教者	川崎公平牧師（日本基督教団鎌倉雪ノ下教会）	
説教題	「自分の本当の願いを知っていますか」	
聖書箇所	ルカによる福音書 第19章1～10節	

◇秋季宗教教育強調週間特別伝道礼

日 時	2014年10月8日（水）10時10分～11時00分	多賀城（参加者519名）
	19時35分～20時25分	土樋夜（参加者39名）
説教者	野村正宣先生（東洋英和女学院中学部高等部教諭）	
説教題	「生き方としてのNPO・NGO」	
聖書箇所	新約聖書 ヨハネによる福音書13章1節～15節	
日時・場所	2014年10月8日（水）10時10分～11時00分	泉（参加者1,278名）
	2014年10月9日（木）10時10分～11時00分	土樋朝（参加者363名）

説教者 本名 靖先生（東洋大学教授）
説教題 「備えられたもの」
聖書箇所 新約聖書 ルカによる福音書 11章9節～18節

◇第26回泉キャンパスクリスマス

日時 2014年12月5日（金）18時30分（参加者353名）
場所 泉キャンパス礼拝堂
説教者 塚本洋子先生（日本基督教団教師）
説教題 説教題 「備えられたもの」

◇大学クリスマス

日時・場所 12月18日（木）10時25分 泉キャンパス礼拝堂（参加者373名）
12月18日（木）16時30分 ラーハウザー記念東北学院礼拝堂（参加者204名）
12月19日（金）10時25分 多賀城キャンパス礼拝堂（参加者193名）
説教者 服部修牧師（日本基督教団蕃山町教会）
説教題① 『共におられる神』（泉、多賀城キャンパス）
聖書① 新約聖書：マタイによる福音書1章18節～25節（泉、多賀城キャンパス）
説教題② 『何に導かれるのか』（土樋キャンパス）
聖書② 新約聖書：マタイによる福音書2章1節～12節
合唱 ヘンデル「メサイア」より抜粋
指揮 岡崎光治（作曲家）
オルガン 今井奈緒子 教養学部教授（大学オルガニスト）
独唱者 熊木晟二（声楽家・バス）
鈴木美紀子（声楽家・ソプラノ）
合唱団 学生有志

◇第19回スプリング・カレッジ

日時 2014年4月12日（土）14時30分～18時
場所 泉キャンパス礼拝堂（1階）小礼拝堂、会議室
内容 キリスト者等推薦入学生へのガイダンス
開会礼拝 原田浩司大学宗教主任
挨拶 佐々木哲夫宗教部長
プログラム 1）年間宗教行事への参加について
2）大学礼拝への出席について
3）聖書研究会か聖歌隊のいずれかへの加入について
4）出席教会の確定と報告について
5）その他（カルト団体に関する注意など）

参加人数 学生 18 名
教職員 8 名 (佐々木宗教部長、野村、村上、出村、原田、羽賀、高橋幸子、菅野)

◇第 40 回サマー・カレッジ

日 時 2014 年 8 月 4 日 (月) ～ 8 月 6 日 (水)

場 所 宮城蔵王ロイヤルホテル

主 題 「異文化交流とキリスト教の歴史 ー支倉常長の旅ー」

講 師 仙台市博物館学芸員 佐々木徹氏

出村みや子大学宗教主任

参加人数 学生 18 名、教職員 8 名 (佐々木宗教部長、野村、北、出村、原田、羽賀、佐藤壮、菅野)

◇第 59 回教職員修養会

日 時 2014 年 9 月 3 日 (水) ～ 9 月 4 日 (木)

場 所 宮城蔵王ロイヤルホテル

主 題 「聖書に聴く」

講 師 佐藤東洋士先生

(桜美林学園理事長・桜美林大学総長、キリスト教学校教育同盟理事長)

参加人数 117 名 (教育職員 59 名、事務職員 58 名)

◇キリスト者等推薦入学生との懇談会

日 時 2014 年 7 月 7 日 (月) 泉キャンパス 参加人数 学生 12 名、教職員 5 名

2014 年 12 月 9 日 (火) 泉キャンパス 参加人数 学生 21 名、教職員 6 名

◇礼拝奉仕者懇談会 (事務職員)

土 樋キャンパス 2014 年 6 月 19 日 (木) 11 時～ 11 時 20 分

参加者 松本学長、佐々木宗教部長、村上大学宗教主任、日野総務部長、
齋藤総務部次長 他 22 名

多賀城キャンパス 2014 年 6 月 11 日 (水) 11 時～ 11 時 20 分

参加者 佐々木宗教部長、中沢工学部長、小松総務部次長 他 19 名

泉 キャンパス 2014 年 6 月 10 日 (火) 11 時～ 11 時 20 分

参加者 松本学長、野村大学宗教主任、佐藤総務部次長 他 11 名

◇礼拝オルガニスト懇談会

日 時 2015 年 2 月 16 日 (月) 11 時～ 13 時

場 所 8 号館第一会議室

参加人数 24 名 (礼拝オルガニスト他)

◇礼拝司会者（牧師・宣教師）懇談会

日 時 2014年2月16日（月）18時～20時
場 所 仙台国際ホテル
参加人数 37名（牧師・宣教師他）

◇宗教部会

開 催 日 2014年4月10日（木）、5月8日（木）、6月12日（木）、7月17日（木）、
10月2日（木）、10月30日（木）、12月4日（木）
2015年1月15日（木）、2月16日（月） 計9回

◇大学宗教主任会

開 催 日 2014年4月10日（木）、5月8日（木）、6月12日（木）、7月17日（木）、
10月2日（木）、10月30日（木）、12月4日（木）
2015年1月15日（木）、1月29日（木） 計9回

◇事務打合せ

日 時 2014年11月18日（火）15時30分～17時
議 題 「2014年度補正予算及び2015年度予算案について」
場 所 泉キャンパス礼拝堂会議室
参 加 者 宗教部長、大学宗教主任、各キャンパス事務担当者

◇宗教部自己点検評価委員会

1回
日 時 2014年10月23日（木）16時～17時 本館会議室
主 題 「2014年度（前期）宗教活動について」
「2014年度（後期）宗教活動予定について」
2回
日 時 2015年2月27日（金）13時30分～15時 8号館第一会議室
主 題 「2014年度東北学院大学宗教活動報告について」
「2015年度東北学院大学宗教活動予定について」

◇第37回青山学院大学合同チャプレン会議（東京会場）

日 時 2014年9月15日（月）9時～18時
場 所 青山学院大学渋谷キャンパス 間島記念館3階大集会室
主 題 「大学礼拝の神学的理解」
発 題 者 発題Ⅰ 野村信先生、出村みや子先生（東北学院大学）
発題Ⅱ 塩谷直也先生、高砂民宣先生（青山学院大学）
参加人数 10名（宗教部長、野村、北、原口、出村、村上、原田、齋藤信二、羽賀、佐藤壮）

◇宗教部研修会

日 時 2014年7月17日(木) 16時～19時30分

場 所 東北学院サテライトステーション会議室

発題Ⅰ 『大学ミニストリーのあり方とそれを可能にする組織のあり方について』

発題者 北博総合人文学科長

発題Ⅱ 『自身の課題を振り返りつつ』

発題者 原田浩司大学宗教主任

参加人数 11名

◇第19回キリスト者教員研修会

日 時 2015年1月22日(木) 15時～19時30分

場 所 仙台国際ホテル

主 題 「新年度の宗教部の歩みについて」

発題者 野村信大学宗教主任

参加人数 教育職員8名、事務職員4名

◇宗教委員会

日 時 2015年3月10日(火) 全学教授会終了後

場 所 土樋キャンパス 8号館第1会議室

◇学長招待卒業生懇談会

日 時 2015年3月9日(月) 12時～13時

場 所 土樋キャンパス 本館会議室

出席者 松本学長、原田大学宗教主任ほか4名

卒業生参加予定 11名

◇聖書研究会

土 樋キャンパス：出村みや子 大学宗教主任 「アウグスティヌスの知恵に学ぶ」

村上 みか 大学宗教主任 「ドイツ語聖書を読む」

原口 尚彰 大学宗教主任 「ローマ書を読む」

北 博 総合人文学科長 「旧約聖書を語ろう」

佐藤 司郎 文学部 「聖書と現代」

多賀城キャンパス：長島 慎二 工学部 「聖書日課を読む」

泉 キャンパス：佐々木哲夫 宗教部長 「絵で読み取る聖書の物語」

野村 信 大学宗教主任 「詩編を読む」

原田 浩司 大学宗教主任 「キリスト教の信仰の基礎」

◇『チャペル・ニュース』

128号「新入生歓迎号」、129-130合併号「サマーカレッジ・秋号」、
131号「クリスマス特集号」

◇『2014キリスト教活動のハンドブック』

2014年4月1日発行

◇『礼拝説教集』

第19号（2015年3月末日発行）

◇『宗教活動報告書』

第15号（2014年7月30日発行）

◇その他

礼拝堂管理、図書資料受入、調査回答

◇卒業記念礼拝

日 時 2015年3月24日（火）10時30分

説教者 野村信大学宗教主任

説教題 「地の塩、世の光」

東北学院大学教職員修養会 キリスト者教員研修会報告書

第 16 号 2015 年 8 月 31 日発行

発行責任者 宗教部長 野村 信

編集責任者 宗教部長 野村 信

出版社 株式会社アクトジャパン

問い合わせ先 東北学院大学総務課

〒 980-8511 仙台市青葉区土樋 1 の 3 の 1

電話 022 - 264 - 6428